

たか おか ふもと
高岡麓遺跡

高岡郵便局庁舎新築工事に伴う発掘調査報告書

1996年3月

たか おか ふもと
高 岡 麓 遺 跡

高岡郵便局庁舎新築工事に伴う発掘調査報告書

1996年3月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会では高岡郵便局庁舎新築工事に伴い、高岡麓遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、古墳時代の住居跡や遺物のほか、これまで県内で調査例の少ない近世城下町の武家屋敷跡や陶磁器、瓦など先人達の生活の跡を検出することができました。本書はこれらの調査成果について報告するものであります。

本書が学術関係者をはじめ生涯教育・学校教育の中で役立てられ、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となることを期待します。

調査に際し、高岡町教育委員会、調査指導の先生をはじめ地域の方々のご協力に対しまして、心から感謝申し上げます。

平成8年3月

宮崎県教育長

田原直廣

例 言

1. 本書は、宮崎県教育委員会が高岡郵便局庁舎新築工事に伴い、九州郵政局の依頼を受けて実施した遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の調査は、平成6年度に実施し、その調査報告は平成7年度に行なった。
3. 発掘調査の期間および調査体制は、第1章第1、第2節のとおりである。
4. 遺物整理にあたって、陶磁器類については大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）に御教示賜わった。
5. 礎石建物遺構の復元的考察については土田充義氏（鹿児島大学工学部）に御教示賜わった。
6. 図面類、遺物の整理は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで行い、遺物の実測・拓本・計測及び製図等については、久木田のほか整理補助員の協力を得てこれを行なった。
7. 本書の執筆及び編集は久木田が行ない、そのほか第1章第1節を谷口武範が当たった。
8. 遺跡の空中写真は、スカイ・サーベイに委託した。
9. 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図をもとに作成し、遺跡周辺地形図については、高岡町教育委員会から提供を受けたものを基礎としている。
10. 高岡麓遺跡の調査は第1地点～第4地点を高岡町教育委員会が行っており、本調査地は第5地点となる。
11. 本書に使用した方位はすべて座標北であり、レベルは海拔絶対高である。また本書で用いた記号はSAが竪穴式住居、SCが土壌、SEが溝状遺構、SHが柱穴、Tがトレンチ、Gがグリットをそれぞれあらわしている。
12. 出土遺物及び調査記録類は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序文	
例言	
第I章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と歴史的環境	2
第II章 調査の概要	
第1節 調査の方法および経過	7
第2節 層序	7
第III章 古墳時代の遺構と遺物	
第1節 竪穴住居	
1 SA1	8
2 SA1出土遺物	8
3 SA2	10
4 SA2出土遺物	11
第2節 包含層出土遺物	19
第IV章 古代から近代の遺構と遺物	
第1節 屋敷遺構	
1 高岡麓の特徴	25
2 屋敷遺構	25
第2節 土墳	
1 概要	26
2 遺構と出土遺物	26
第3節 溝状遺構	
1 概要	40
2 遺構と出土遺物	40
第4節 柱穴群	
1 概要	43
2 出土遺物	43
第5節 包含層の遺物	44
第6節 その他の遺物	
1 瓦	48
2 フイゴの羽口	49
3 銭貨・キセル	49
第V章 まとめ	57

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡地図	3
第2図 発掘調査区及び周辺地形図	4
第3図 高岡麓遺跡遺構配置図及び土層断面図	5・6
第4図 SA1	8
第5図 SA1出土遺物実測図	9
第6図 SA1出土遺物実測図	10

第7図	SA 2	11
第8図	SA 2 出土遺物実測図	12
第9図	SA 2 出土遺物実測図	13
第10図	SA 2 出土遺物実測図	14
第11図	SA 2 出土遺物実測図	15
第12図	SA 2 出土遺物実測図	16
第13図	SA 2 出土遺物実測図	17
第14図	包含層出土遺物実測図	18
第15図	包含層出土遺物実測図	18
第16図	屋敷間取り図	25
第17図	石垣及び礎石配置図	27・28
第18図	SC 1・SC 3・SC 4・SC 5・SC 6	29
第19図	SC 7・SC 10・SC 12	30
第20図	SC 16・SC 18・SC 19・SC 24・SC 25・SC 30	31
第21図	SC 20・SC 21・SC 22・SC 23・SC 27・SC 28・SC 31・SC 32	32
第22図	SC 9・SC 11・SC 13・SC 26	33
第23図	SC 14・SC 29	34
第24図	SC 出土遺物実測図	35
第25図	SC 出土遺物実測図	36
第26図	SC13出土軽石製品実測図	37
第27図	SC 出土遺物実測図	38
第28図	SE 1・2・3・5・6 土層断面実測図	40
第29図	SE 出土遺物実測図	41
第30図	SE 出土遺物実測図	42
第31図	SE 6 出土石臼実測図	43
第32図	SH 出土遺物実測図	44
第33図	包含層出土遺物実測図	45
第34図	包含層出土遺物実測図	46
第35図	瓦実測図	47
第36図	フィゴの羽口実測図	48
第37図	銭貨拓影	49
第38図	キセル実測図	49

表 目 次

観察表	20~23
土錘計測表	24
石器計測表	24
銭貨出土遺構一覧表	49
キセル出土遺構一覧表	49
観察表	50~55
土錘計測表	56
石器計測表	56
フィゴの羽口計測表	56
瓦観察表	56

挿 図 目 次

遺跡全景（東より）	61
作業風景（後ろに天ヶ城跡を望む）	61
陶磁器等出土遺物	62
SA1 遺物出土状況	63
SA1 出土遺物	63
SA1・2・包含層出土石器	63
SA2 出土遺物	63
SA2 遺物出土状況	64
SA2 出土遺物	64
SC9（東より）	65
SC11 半さい状況（東より）	65
SC14（東より）	65
SC26（南より）	65
SH（柱穴群）出土遺物	65
キセル	65
SE6 出土石臼（92）	65
SE2 出土硯（85）	65
ファイゴの羽口	65
SE3 出土砥石（86）	65
銭貨	65
礎石と石垣（東より）	66
SE3 鉄滓・ファイゴの羽口出土状況	66
礎石No.2	66
礎石No.9	66
礎石No.13	66
SC11 出土遺物	66
SC24 出土遺物	66
包含層（近世面）出土遺物	66
土人形・土製品等	66
瓦（1～13）	66
ガラス製品	66

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎市の西に位置する高岡町の中心部は、江戸時代、高津氏の麓集落として周知されている。今回遺跡地内において九州郵政局による高岡郵便局の建設が計画されるにともない、平成6年5月16日付で建設予定地内の文化財の所在についての照会があった。県文化課では、予定地の分布調査を行ったが、以前民家が建っていたことなどから遺跡の状況を把握できなかつたため確認調査を実施した。その結果、予定地全体に麓集落とされる江戸期の遺構・遺物を確認し、さらに古墳時代および平安時代の遺物等も出土し、複数の文化層の存在が推定された。この結果を基に九州郵政局から平成6年6月8日付で文化財の取扱についての事前協議の文書が提出され、遺跡の取扱についての協議を行った。その結果、発掘調査が終了した後に建設工事を実施することとなった。また、報告書作成は平成7年度に作成することで合意した。

なお、発掘調査は、平成6年10月20日から平成7年1月20日まで実施した。

第2節 調査の組織

調査主体 県教育委員会

教 育 長	田 原 直 廣 (平成6年度～)
教 育 次 長	八 木 洋 (平成5年度～)
	中 田 忠 (平成5年度～)
文 化 課 長	江 崎 富 治 (平成6年度～)
同 課 長 補 佐	田 中 雅 文 (平成5年度～)
主幹兼庶務係長	高 山 恵 元 (平成6年度～)
主幹兼埋蔵文化財 第一係長	岩 永 哲 夫 (平成5～6年度)
主幹兼埋蔵文化財 第二係長	岩 永 哲 夫 (平成7年度～)
主 事	久木田 浩 子 (埋蔵文化財第一係)

第3節 遺跡の位置と歴史的環境

高岡麓遺跡は、東諸県郡高岡町大字飯田字井ノ上338-1他に所在する。

高岡町は、宮崎平野の西約15kmに位置する。70%以上が山林である町の西側には標高170mの台地が広がり、その中央部を大淀川が東流している。そのため西側の山間部を中心に小規模な谷と河岸段丘による小丘陵が形成されている。町の遺跡のほとんどがそれらの丘陵地に存在している。遺跡の時代幅も広く、旧石器から近世に至るまでの遺跡が豊富にある。今回調査の対象となった高岡麓遺跡（第5地点）は大淀川の氾濫源である標高約14mの平野部、高岡麓の東側中央に位置している。

高岡麓遺跡は、薩摩藩政時代に島津氏が東側の防御の要として構築した天ヶ城に対する麓であり、近世を中心とした遺跡である。これまでの表採資料からは、高岡麓遺跡は中世まで遡るのが限度であったが、今回の調査で中・近世とともに古代や古墳時代の遺構・遺物が多く出土し複合遺跡であることが明確となった。

古墳時代の遺跡は、東高岡地区と浦之名一里山地区の丘陵を中心に広がっている。東高岡地区の古墳は県指定古墳として高岡古墳が3基在る。未調査であるが、高岡古墳周辺で古墳時代中期の壺と鉄製品が発見されている。その他に五ツ塚古墳1～4号がある。また、学頭遺跡では初頭～前期にかけての遺物が出土し集落が営まれている。それに隣接した八尾遺跡でも住居跡が検出されている。浦之名一里山地区の丘陵には南九州特有の地下式横穴墓があり、久木野地下式横穴墓群の3基で調査が行なわれている。

古代は、文献によると高岡周辺は「穆佐郷」といわれている。宗栄司遺跡・蕨野遺跡・二反田遺跡があり、蕨野遺跡では9世紀後半の土師器生産に伴う焼成土壌（窯）が検出されている。

中世では、南北朝時代に日向の中心となり足利氏の九州における勢力拡大の拠点となった穆佐城がある。穆佐城は、木城町の新納院古城・高城町の三侯院月山日和城とともに日向の三高城と称されているところである。その後、穆佐城は、島津氏の居城、伊東氏48城のひとつとなるなど岡氏の勢力争いの舞台となる。

近世になるとこれまでの中心が穆佐城周辺であったのが、天ヶ城周辺に移行する。薩摩藩は、天ヶ城（高岡郷）と穆佐城（穆佐郷）の据地に多くの郷士を居住させ、麓を形成させていった。高岡麓遺跡では、計画的な街路設計がなされ郷士屋敷群と町屋群に分割されている。高岡麓遺跡第1地点の調査は町屋の調査で、素掘の井戸や土壇等を検出し、大火跡と思われる焼土層を確認している。第2地点は、武家屋敷群にあたるところで、柱穴や土壇等を検出し、国産陶磁器や土師器が出土している。第3地点は内山神社の裏斜面で、この一帯は当時高福寺があったところである。この斜面からは大淀川に延びる街路が一望でき、麓形成の重要な場所であったことであろう。遺構遺物は確認されていない。第4地点は北東側に龍福寺跡がある郷士の屋敷が建ち並んでいた一角である。また、高岡麓周辺では朝羽田・角ノ園遺跡が調査され陶磁器や土師器、瓦質の銅片等が出土している。遺構は柱穴や溝状遺構等が検出されている。

<参考文献>

- (1) 「高岡町内遺跡 遺跡発掘事前総合調査報告書」【高岡町埋蔵文化財調査報告書】第2集
高岡町教育委員会 1994年
- (2) 「高岡町遺跡詳細分布調査報告書」【高岡町埋蔵文化財調査報告書】第2集
高岡町教育委員会 1992年
- (3) 「高岡町内遺跡Ⅲ」【高岡町埋蔵文化財調査報告書】第8集
高岡町教育委員会 1995年



1. 高岡古墳群 2. 五ツ塚古墳1~4号 3. 学頭遺跡 4. 八見遺跡 5. 宮水流遺跡 6. 城ヶ峰遺跡 7. 宗栄司遺跡 8. 蕨野遺跡 9. 二反田遺跡 10. 穆佐城跡 11. 天ヶ城跡 12. 朝羽田遺跡 13. 角ノ園遺跡 14. 高岡麓遺跡 (a.第1地点 b.第2地点 c.第3地点 d.第4地点 e.第5地点…調査地)

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡地図 (1/50,000)



第2図 発掘調査区及び周辺地形図 (1/5,000)



第3図 高岡麓遺跡遺構配置図(1/150)及び土層断面実測図(1/80)

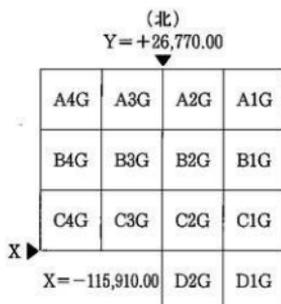
第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の方法及び経過

調査対象区は以前2件の建物が建っていたところで、東西に約50m、南北に約30mの「L」字型であった。西側の東西約10m、南北約15mの部分に関しては建物の基礎やゴミ穴等でかなり多くの攪乱があり調査対象外とした。

調査区はXYの座標にそって10mのグリットを設定した。調査は、まず、重機で表土を15cm程除去し遺構確認をおこなった。炭化物混じりの土が井戸より北側全体に広がっていたため遺構検出が困難であった。数回にわたって精査し、約400の柱穴群と土壇28基(古代～近世)、溝状遺構6条(近世～近代)、屋敷建物遺構の礎石根石16基と石垣(近世～近代)を検出した。大量の陶磁器、フイゴの羽口、鉄滓、キセル、銭貨、瓦、土人形、ガラス製品等が出土している。

また、近世の遺構に古墳時代の遺物が混在していたことからさらに下層の確認をおこなった。はじめ人力で東側の10m×10mを50～60cm程掘り下げたところかなり多くの古墳時代の土器が出土した。途中、時間的制約上、土器の広がりを見て重機で古墳時代の遺構検出面まで掘り下げた。井戸より東側には遺物の確認はなかったが、西側に竪穴式住居2軒(古墳中期頃)が検出された。甕、壺、高坏、鉢等が多数出土している。



グリット設定図

第2節 層序 (第3図)

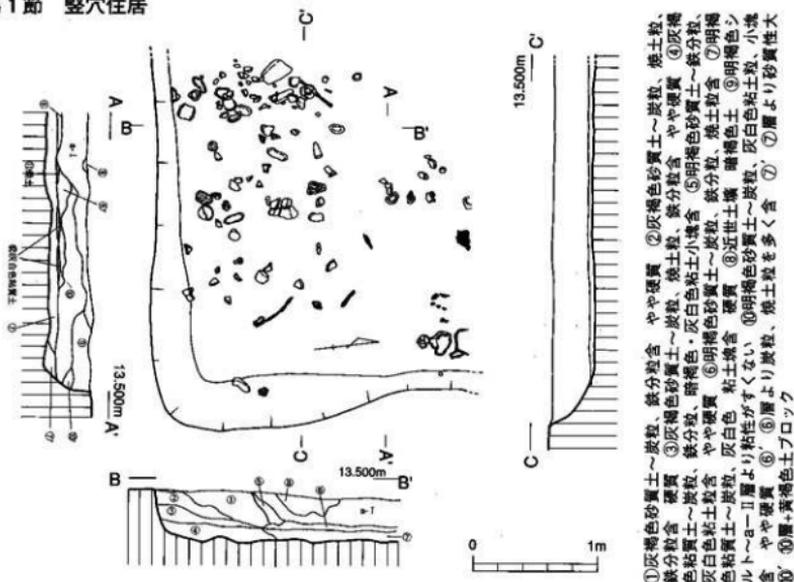
当遺跡の基本層序は柱状図のとおりである。第Ⅰ層は暗褐色の表土で最近まで使われていた陶磁器などが混入している。第Ⅱ層は暗褐色砂質土の造成土で硬質である。井戸より北半分は炭化物がかなり混ざった層をⅠ層とし、南側の石垣内は数回の造成がおこなわれているが確かな数は確認できない。第Ⅲ・Ⅳ層は明褐色粘質土で遺物包含層である。第Ⅳ層が第Ⅲ層より若干粘質が強い。古代から近世の遺構がこれらの層に掘り込まれ第Ⅳ層が古墳時代の遺構検出面になっている。第Ⅴ層はオリブ灰色砂質土で第Ⅵ層はⅤ層とⅦ層が混ざった層で砂質が強くなる。第Ⅶ層は灰青色砂質土である。第Ⅴ層から下には古墳時代やそれ以前の遺物の出土もなく、第Ⅶ層まで下げるとかなりしめりが強くなる。

第Ⅱ層の北側の造成土は炭化物が一面に広がっていたため遺構検出にかなりの苦勞を要した。第Ⅲ・Ⅳ層は水の浸透の作用で鉄分が斑点または筋状に入り、第Ⅴ層より下層では砂質が強くなるため鉄分の沈殿がみられる。水の浸透と鉄分の沈着は大淀川の氾濫源にあることが考えられる。

層	厚さ
Ⅰ: 表土	15～20cm
Ⅱ: 造成土	5～15cm
Ⅲ: a-Ⅰ層	20～40cm
Ⅳ: a-Ⅱ層	20～30cm
Ⅴ: b層	15～20cm
Ⅵ: b'層	15～20cm
Ⅶ: c層	20～25cm

第三章 古墳時代の遺構と遺物

第1節 竪穴住居



第4図 SA1 (1/40)

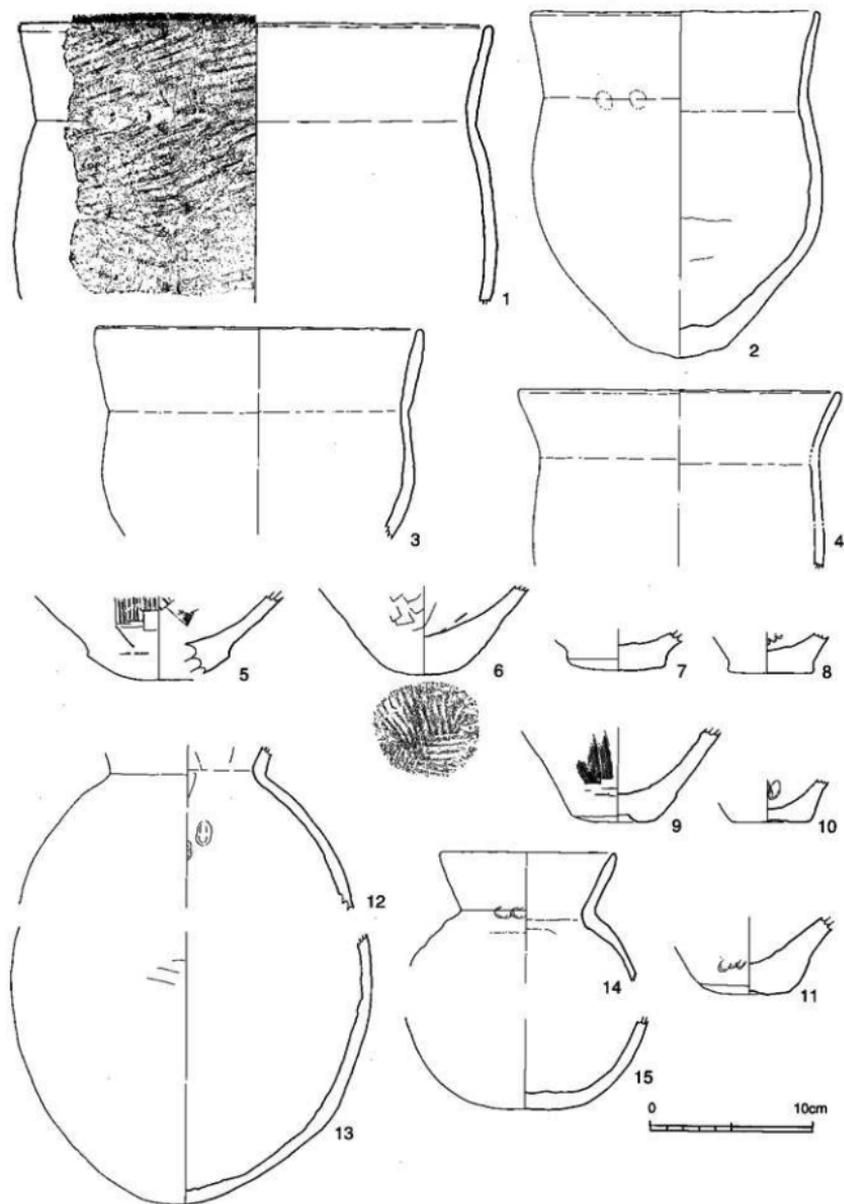
1 SA1 (第4図)

調査区の北西部で検出した遺構であるが、遺構の約4分の1程度を調査した。規模は不明で深さは検出面から床面までが約0.35mである。西側の土層確認トレンチの掘り下げ時に掘り込みと焼土層(⑩層)を確認し検出されたが、粘質土の地山に同色の砂質粘土の覆土であるためプランの確定が困難であった。上層に近世の土壌が掘り込まれ、陶磁器等の遺物の流れ込みも見られたが、床面近くで甕・壺・高坏・坏等が出土している。柱穴は検出できず、位置は不明である。

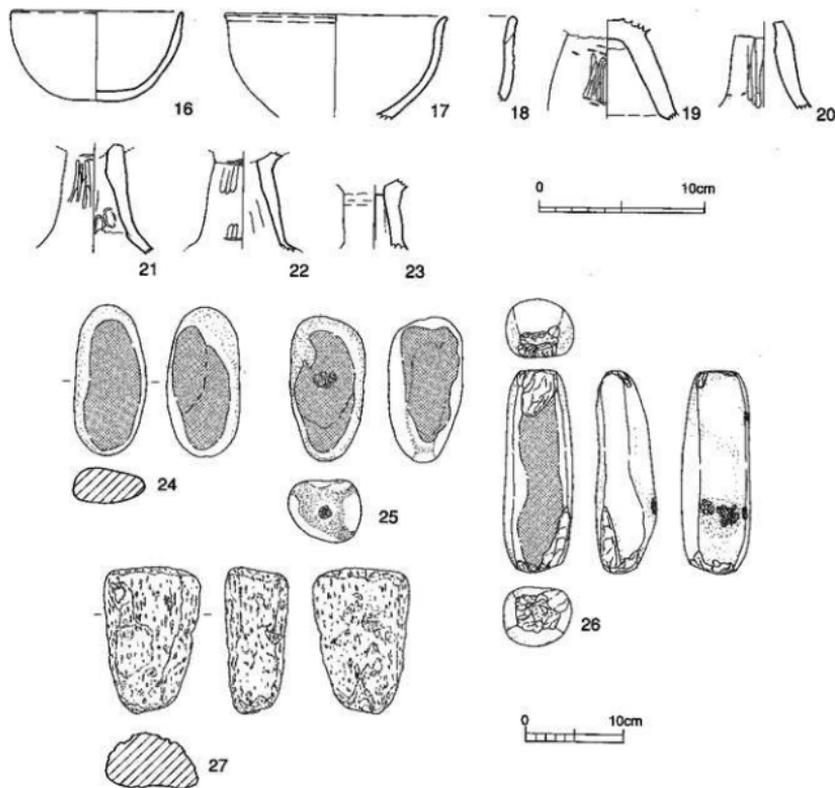
2 SA1出土遺物

(第5図)………1～11は甕である。1と3・4は外面に叩き調整が施され、3と4はその後丁寧にナダられている。1は口縁部と胴部の最大径がほぼ等しく、3と4は口縁部に最大径をもつ。ともに口唇部は丸く仕上げられている。2は口縁と胴部の最大径がほぼ等しく、尖底を呈する。5～11は甕の底部である。5・7・8は胴部と底部の境が明瞭で、5と7は丸みを帯びた平底で8は平底である。それぞれ最大径に比して小さな底を呈するものであると思われる。6と9～11は胴部と底部の境が不明瞭なものである。6は丸底で外面に叩き調整を施す。9・11はやや丸みを帯びた平底で10は平底を呈する。それぞれ底部中央部に窪みをもつ。

壺は12～15がある。12と13は同一個体であると思われる。頸部は屈曲し長胴で、尖底を呈する。14は球形の胴部からストレートに口縁が開くものとおもわれる。15は壺の底部である。



第5图 SA1出土遺物実測図(1/3)



第6図 SA 1 出土遺物実測図 (16~23……1/3, 24~27……1/5)

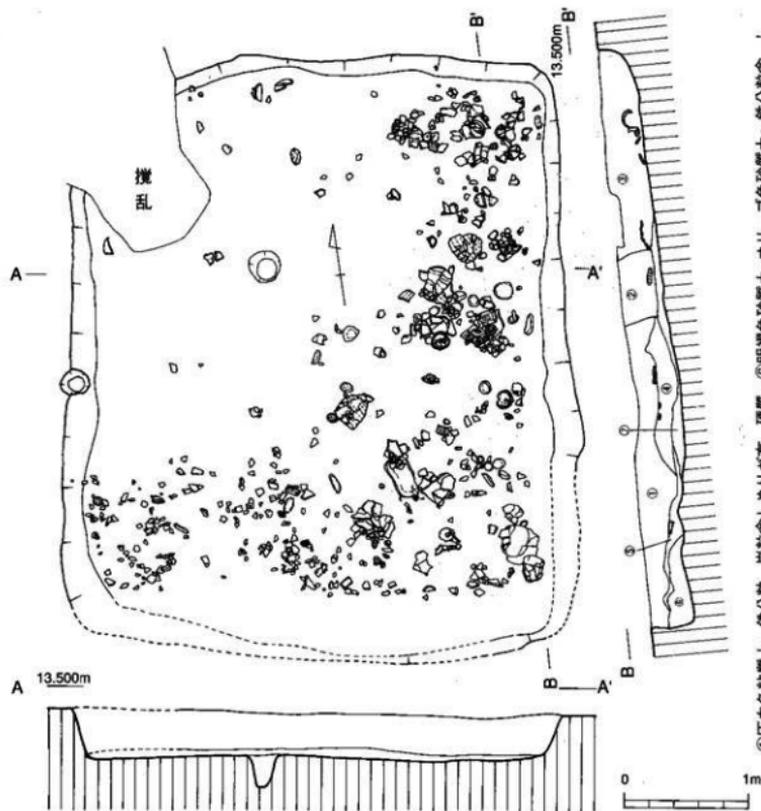
(第6図) ……16~18は鉞である。16は丸底で体部がストレートに開き、17は口唇部が外反している。どちらもナデ仕上げである。18は外面に叩き調整が施され、口唇部は丸く仕上げられている。

19~23は高坏の脚柱部である。19と22は脚柱部にやや膨らみをもち、屈曲して裾部に延びる。外面は縦方向のヘラ磨きで、内面は19がナデ、22はヘラ削りとナデ仕上げである。20は脚柱部にやや膨らみをもち緩やかに裾部に広がる。21と23は外反しながら裾部に広がる。20と21は外面は縦方向のヘラ磨きで内面は20が指ナデ、21がヘラ削りとナデである。23は外内面ともナデ仕上げである。

石器は24~27がある。24・25は磨石、26は散石で砂岩製である。27は軽石製品ではっきりとした面取はみられないが全体的に擦痕が見られる。

3 SA 2 (第7図)

調査区の北西部、SA 1の東側で検出した遺構である。規模は東西約4.0m、南北約5.0mで、検出面から床面までの深さは約0.35mである。SA 1と同様粘質土に同色の砂質粘土が覆土で、平面からプランを確定するのは困難で、サブトレンチを数本あげ、住居の壁の立ち上がりを確認しながら調査をおこなった。柱穴は検出されていない。遺物の出土状態は、住居の東と南側に甕・壺・高坏・鉞等が多



①灰白色粘質土～鉄分粒、炭粉含しめり有り 硬質 ②明褐色砂質土+オリブ色砂質土～鉄分粒含しめり大 ③にぶい明褐色砂質土～鉄分粒、炭粉含 砂質性大 硬質 ④②層より砂質性大鉄分粒含 ⑤灰褐色砂質土～水的作用で鉄分粒が沈殿 砂質性大 硬質 ⑥灰青色砂質土+褐色砂質土～鉄分粒散 軟質土 ⑦オリブ色+明褐色砂質土～鉄分を多く含 粘性わずかに有 軟質

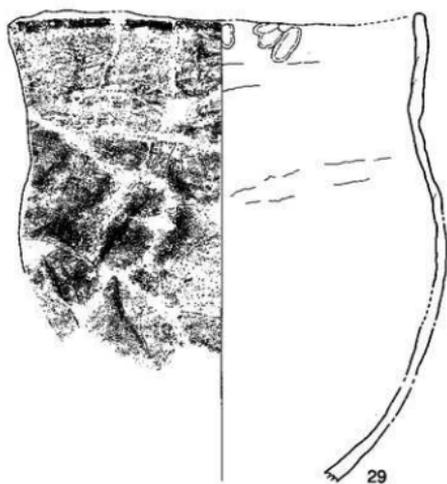
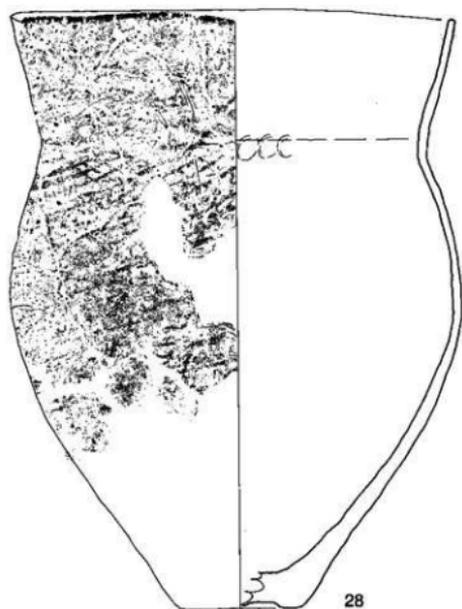
第7図 SA 2 (1/40)

量に出土している。その中でも住居の3分の2南側に外面に叩き調整のある甕(28-38等)が、北東側に外面にヘラ磨き調整が施された丸底の壺(59-64)が集中して出土している。③層にあたる部分は別の遺構があることも考えられる。

4 SA 2 出土遺物

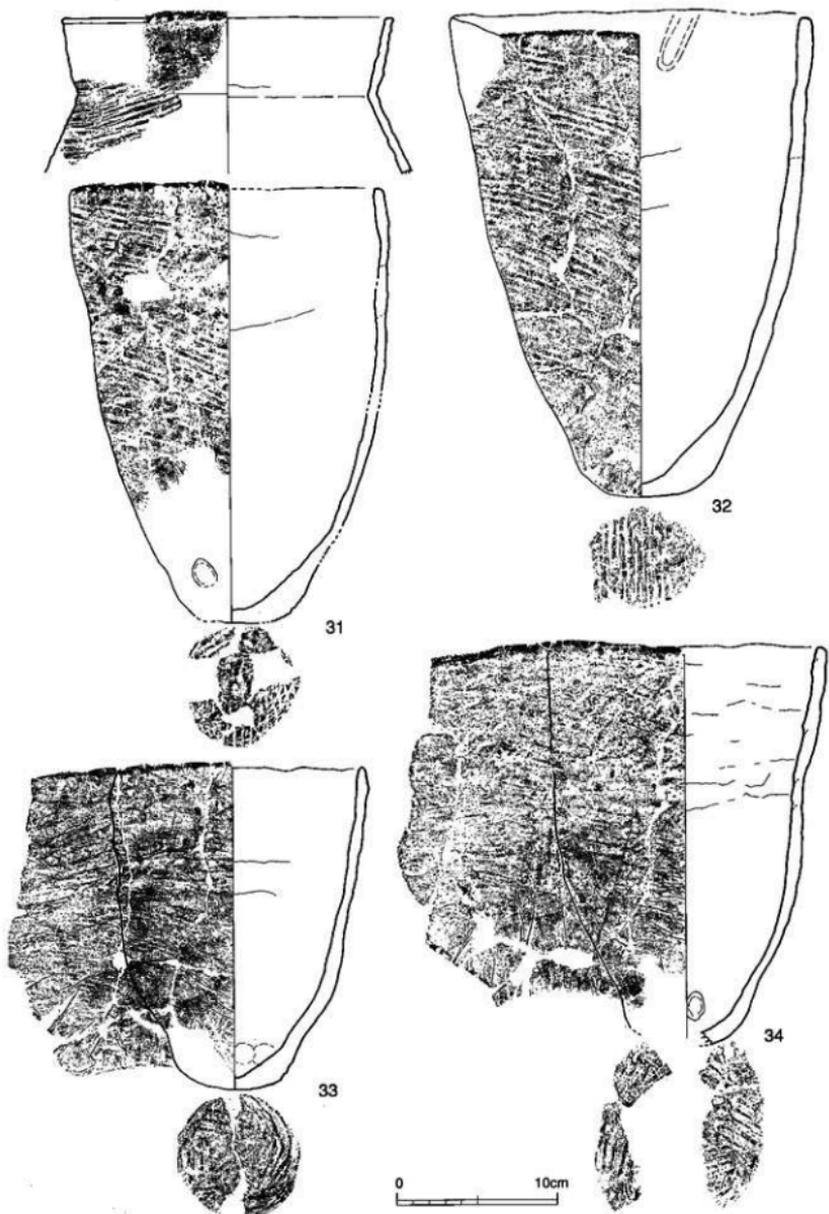
(第8・9・10図) ……28-38は外面に叩き調整のある甕である。28と29は緩やかに頸部が屈曲し内湾気味に口縁が延びる。28は上げ底を呈する。30は「く」字に頸部が屈曲しほぼ直線的に口縁が延び、口唇部が平坦である。31-38は丸底を呈し、頸部にくびれを持たずに直線的に胴部が延びる、いわゆる砲弾型の甕である。底部と胴部の境には外内面とも指ナデがみられ、底部と胴部は別に作ったものをつなぎ合わせたと思われる。31-35・37は口唇部が丸く、36と38は平坦に仕上げられている。

(第11図) ……39-42は甕である。41は内面の口縁部に数本の横方向の条痕がある。43-58は甕の底部である。45・46は平底で胴部と底部の境が明瞭でない。45は外面に叩き調整を施す。43・44・47-51は胴部と底部の境が明瞭で、47・48は平底、43・44・49-51は丸みを帯びた平底を呈する。52-54は丸



0 10cm

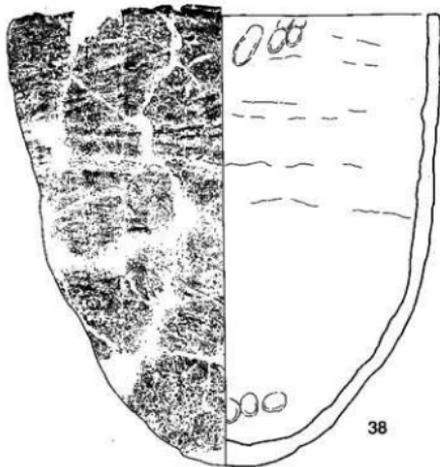
第8図 SA 2出土遺物実測図(1/3)



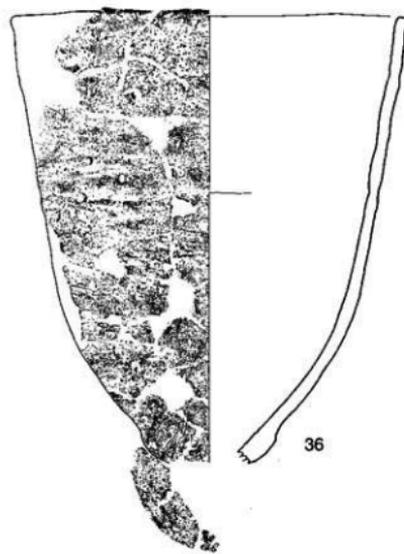
第9图 SA 2出土物实测图 (1/3)



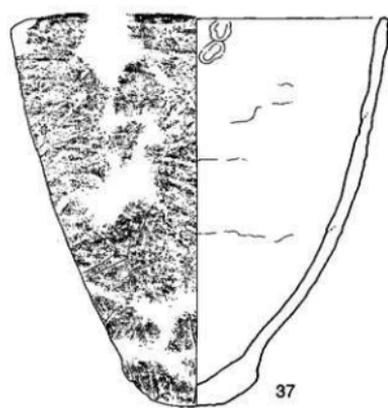
35



38



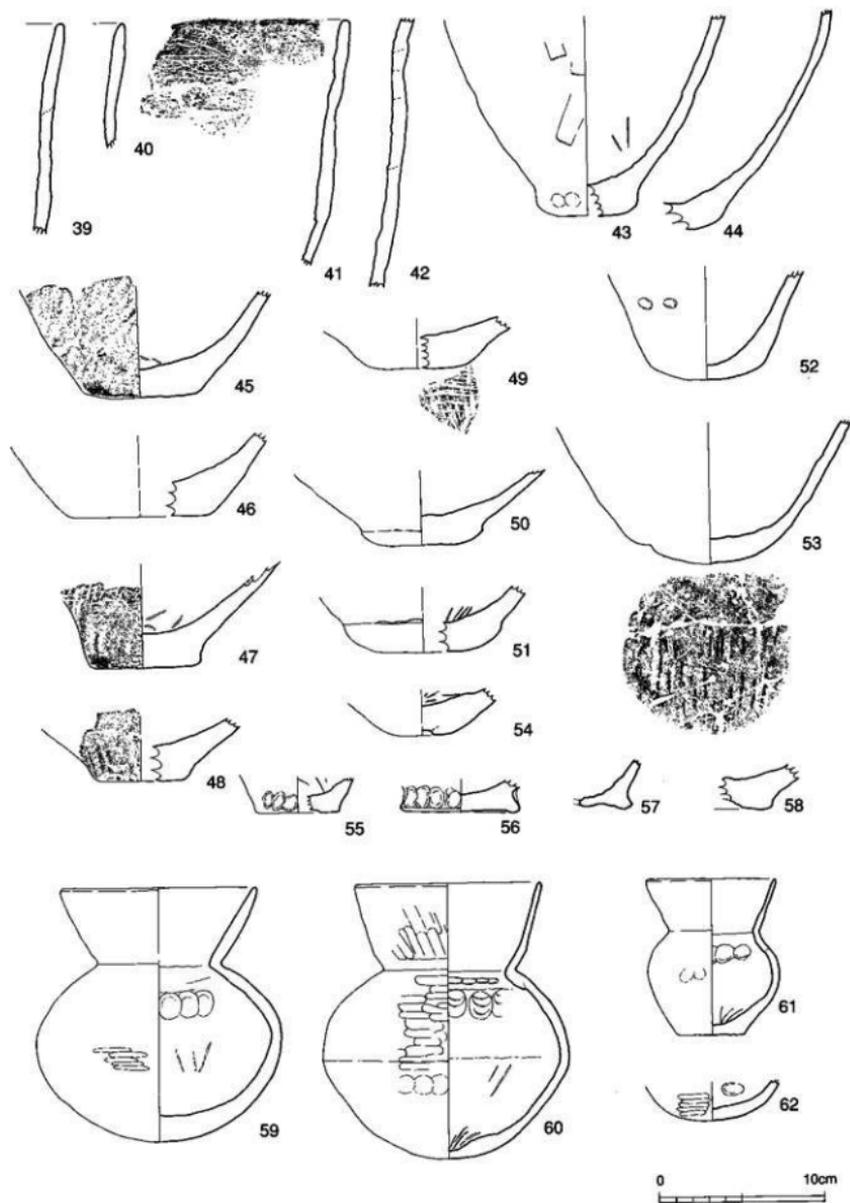
36



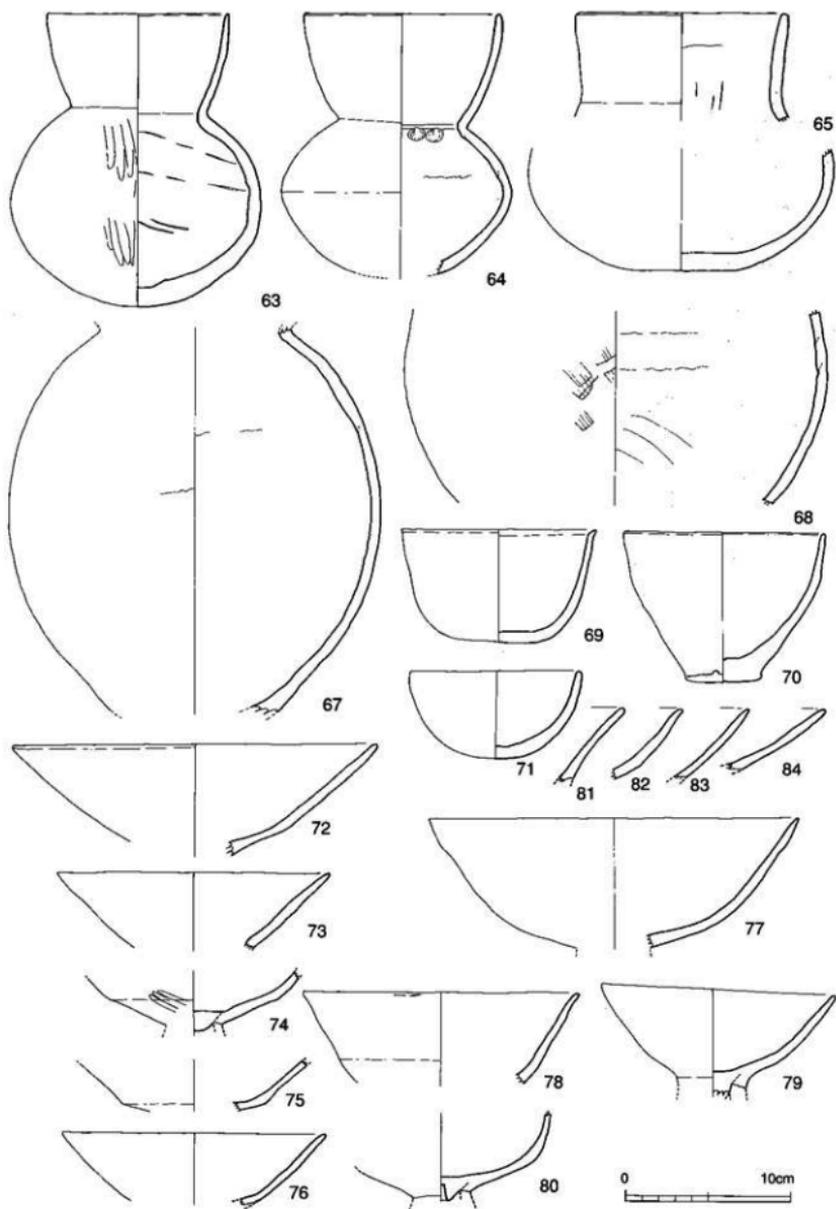
37



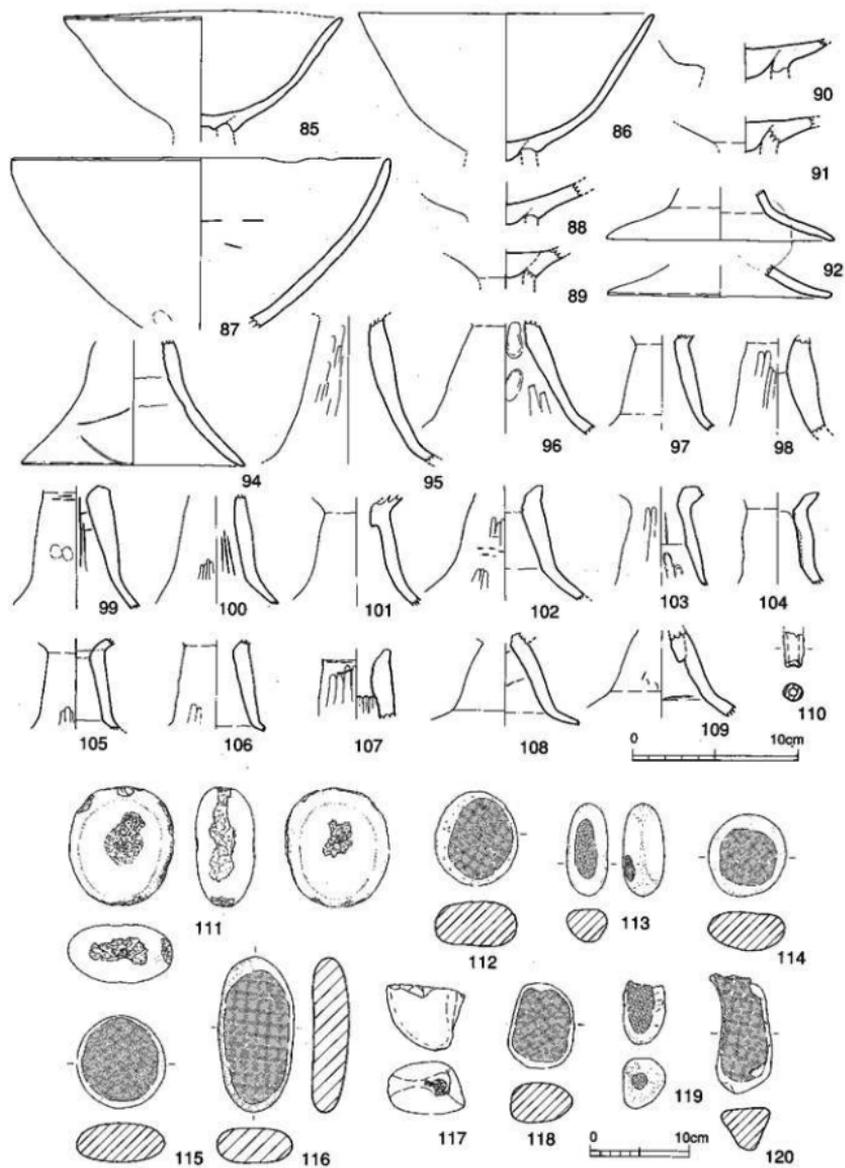
第10図 SA 2 出土遺物実測図 (1/3)



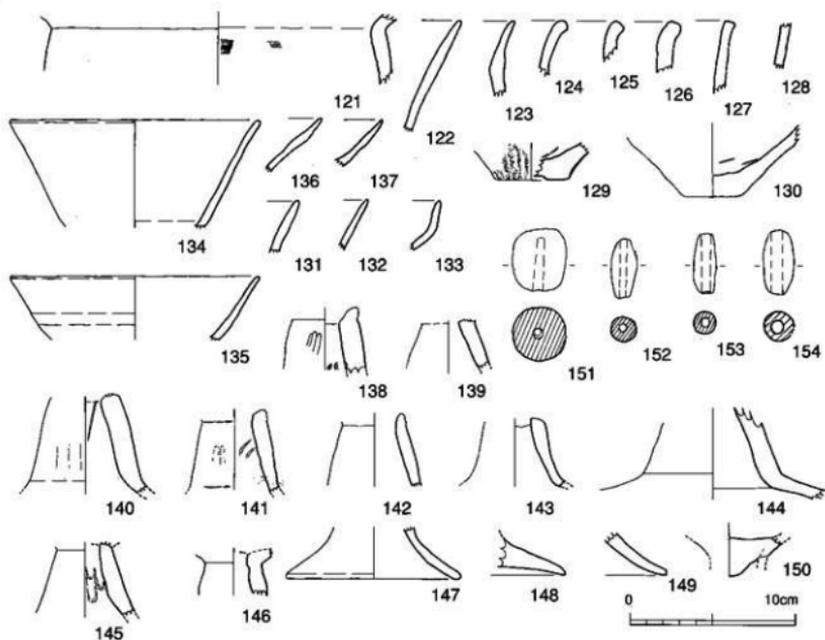
第11图 SA 2 出土遗物实测图 (1/3)



第12図 SA 2 出土遺物実測図 (1/3)



第13圖 SA 2出土遺物実測図 (85~110...1/3, 111~120...1/5)

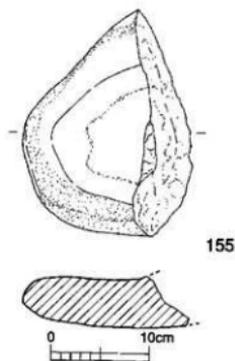


第14図 包含層出土遺物実測図(1/3)

底で54は底部中心に窪みがある。55~58は上げ底である。47~49・52~53は叩き調整が施されている。

壺は59~62がある。59は球形の胴部に直線的に延びる口縁がつき、厚手で胴部の肩が張っている。外面は横方向のヘラ磨きとナデ、内面はナデ仕上げである。60は球形の胴部にゆるく内湾しストレートにやや長く延びる口縁を持つ。胴部は肩張りし頸部にゆるい窪みを持つ。外面は横方向のヘラ磨きとナデ、内面はナデである。61は小型の直口壺で平底を呈する。胴部径と口径がほぼ等しく頸部は緩やかに屈曲し直線的にやや長く延びる口縁を持つ。外内ともナデである。62は丸底の小型壺で、外面は横方向のヘラ磨きとナデ、内面はナデ仕上げである。

(第12図) ……63は球形の胴部に内湾しやや長く延びる口縁を持つ壺で、胴部が厚く外面は縦方向のヘラ磨きとナデ、内面はナデ仕上げである。64は胴部の高さが口縁の高さの1.5倍程あり扁球形を呈し胴部中位が張り出している。頸部は屈曲し内湾しながら長く延びる口縁を持つ。65は長頸の外反気味の口縁を持つ壺であると思われる。66は壺の底部である。67は長胴で尖底の壺と思われ、68は外面はハケ目とナデ、内面はナデ仕上げの壺である。



第15図 包含層出土遺物実測図(1/5)

鉢は69・70がある。69は体部は内湾し口縁端部を外に突き出す。底は丸底を呈する。70は平底で胴部が直線的に開く。外内面ともナデ仕上げである。

71は坏で外内面ともナデである。72～84は高坏の坏部である。72・73・76は坏部が浅く底部から体部がストレートに延びる。74と75は底部と体部が屈曲し、74は内湾気味に75は外反しながら体部が延びると思われる。77～79は坏部が深く坏部に屈曲を持たずに内湾気味に体部が延びる。78は口縁端部がわずかに外反する。80は底部から体部が内湾しながら立ち上がる。

(第13図) ……85～87は高坏の坏部である。それぞれ坏部が深く坏部に屈曲を持たない。85は外反気味に、86は直線的に口縁が広がる。87は口縁端部がやや内湾している。88～91は高坏の坏部の底部である。92・93は高坏の裾部で92は裾部端部が内湾し、93は外反している。94は高坏の脚柱部～裾部で、屈曲しないで裾部が広がる。95～109は高坏の脚部である。95は脚柱部が長く脚柱部から裾部に屈曲を持たずに広がる。外面は縦方向のヘラ磨きとナデ、内面はナデ仕上げである。96・101・109は脚柱部から裾部が屈曲しないで広がり、96・109は内向して坏部と接合される。それぞれナデ仕上げである。97・99・100・102・105は脚柱部にやや膨らみがあり脚柱部から裾部に緩やかな屈曲を持つものである。97は外内面ともナデで、99・100・102・105は外面は縦方向のヘラ磨きとナデ、内面はナデ仕上げである。98・103・104・107は脚柱部に膨らみを持つもので、98・103・107は外面は縦方向のヘラ磨き、内面はナデ仕上げである。104は外内面ともナデ仕上げである。106と108は脚柱部から裾部に屈曲を持つもので108は内向して坏部に接合する。106は外面は縦方向のヘラ磨き内面はナデ、108は外内面ともナデ仕上げである。110は土鉢である。

石器は111～120がある。111は砂岩製の敲石で両面、側面とも敲打痕がみられる。117も敲石である。112～116・118～120は磨石で113～116・119・120は砂岩製である。

第2節 包含層出土遺物

古墳時代の遺物包含層はa-I下層とa-II層である。近世、近・現代の遺構検出面から40cm程掘り下げると古墳時代の遺物包含層になる。そのため近世や近・現代の遺構の多くが包含層に掘り込まれ、近世の土壌や柱穴、溝状遺構等に古墳時代の遺物が流れ込んでいる。ここではそれらの遺物も包含層出土の遺物として扱っている。

(第14図) ……121～130は甕である。121は胴部内面に縦方向の削り調整がみられる。128は甕の胴部と思われるが、外面に二条の線刻がみられる。129は甕の底部で上げ底を呈し外面は叩き調整である。130も甕の底部で胴部に対して小さな平底を呈するものと思われる。

131と132は壺の口縁部である。

133は鉢の口縁部で外内面ともナデ仕上げである。

134～137・150は高坏の坏部である。134は坏部が深くわずかに外反しながら体部から口縁部に延びている。135は口縁端部がやや外反している。138～146は高坏の脚部である。脚柱部にわずかに膨らみを持つもの138・140～142・146、脚柱部がストレート139・144もしくは外反しながら延びるもの143・145がある。147～149は高坏の裾部である。

(第15図) ……155は砂岩製の石皿で1/3程が欠損している。

観 察 表

国 道 番 号	道 路 種 別	出 土 地 点	群 集	部 位	文 様 お よ び 装 束		色 票		硬 度	胎 土	備 考
					外	内	外	内			
5	1	SA1	窯	口縁-胴部	口縁-ナデ 胴部-平打タキ後ナデ	風化気味、横、斜のナデ	灰青 淡黄	良好	0.1-0.7mmの砂粒を含む	外-内	
*	2	SA1	窯	口縁-底部	風化気味、タテのナデ 底部-指押さえ	工具によるナデ、ヨコの楕円ナデ	黄緑、暗灰	良好	0.1-2.5mmの砂粒を含む	外-内	
*	3	SA1	窯	口縁-胴部	口縁-胴部、ナデ 胴部-平行タキ後ナデ	口縁-胴部、斜のナデ	淡黄	良好	0.4-0.7mmの砂粒を含む	外-内	
*	4	SA1	窯	口縁-胴部	口縁-胴部 胴部-平行タキ後丁家ナデ、ナデ	ナデ	黄緑	良好	0.1-0.6mmの砂粒を含む	外-内	
*	5	SA1	窯	胴部下位-底部	胴部-工具による横、斜のナデ 砂粒の散りあり 底部-工具によるナデナデ	胴部-底部、工具による斜のナデ後ナデ	淡黄	良好	5mmの砂粒を含む		
*	6	SA1	窯	胴部下位-底部	胴部-平行タキ後縦工具による 斜のナデ、平行タキ 気味、平行タキ後ナデ	胴部-底部-縦工具による斜のナデ	淡黄	良好	0.1-0.5mmの砂粒を含む		
*	7	SA1	窯	底部	ナデ	工具によるナデ、指ナデ	淡黄	良好	3mmの砂粒を含む		
*	8	SA1	窯	底部	胴部-工具によるナデ後ヨコの指ナデ 風化著しい	指押さえ、風化気味、ナデ	淡黄	良好	0.1-3mmの砂粒を含む		
*	9	SA1	窯	胴部下位-底部	胴部-工具によるタテのハケ目後指 ナデ、ヨコナデ	工具によるタテ、ヨコのナデ後ナデ	淡黄	良好	3-5mmの砂粒を含む	内-外	
*	10	SA1	窯	底部	胴部-風化気味、斜のナデ 底部、ナデ	放射状に工具痕、指押さえ	淡黄	良好	0.1-3mmの砂粒を含む		
*	11	SA1	窯	胴部下位-底部	胴部下位、ヨコに工具痕、指ナデ 底部、丁家ナデ	横、斜方向の工具によるナデ	淡黄	良好	4mm以下の砂粒を含む		
*	12	SA1	窯	胴部-胴部上位	胴部-ナデ 胴部下位、タテ、ヨコのナデ 胴部下位、斜、横のナデ	胴部-斜ナデ、工具痕 放射状に、風化著しい、指ナデ 胴部下位、風化気味	黄	良好	0.1-5mmの粒を含む	外-内	
*	13	SA1	窯	胴部-胴部上位	胴部下位、横、斜のナデ、工具痕 胴部下位、斜、横のナデ 底部、ナデ、風化著しい	胴部下位-胴部下位、斜のナデ 風化著しい 底部、風化著しい	黄	良好	0.1-3.5mmの粒を含む	同一群集か	
*	14	SA1	窯	口縁-胴部上位	口縁-胴部、ヨコナデ 胴部、指押さえ 胴部下位、ヨコナデ	口縁、ヨコナデ 胴部上位、ヨコナデ	黄	良好	3mm以下の粒を含む	外-内	
*	15	SA1	窯	胴部下位-底部	胴部下位、ヨコナデ 底部、斜のナデ、工具痕	ヨコナデ ナデ	淡黄 暗灰	良好	3mm以下の粒を含む	外-内	
6	16	SA1	鉢	底部	丁家ナデ	ヨコナデ	黄	良好	0.1-1mmの粒を含む	外-内	
*	17	SA1	鉢	口縁-胴部	工具ナデの後ナデ 風化気味	ナデ、風化気味	黄	良好	0.1-4mmの粒を含む	内-外	
*	18	SA1	鉢	口縁-胴部	口縁-ヘラツキ工具によるヨコナデ 胴部上位、ヨコナデ 胴部下位、平行タキ	口縁-胴部上位、ヨコナデ 胴部下位、斜のナデ、指押さえ	淡黄	良好	0.1-4mmの粒を含む		
*	19	SA1	高坏	胴部	タテのヘラツキ、工具痕	指ナデ、風化気味	黄	良好	0.1-1mmの粒を含む		
*	20	SA1	高坏	胴部	タテのヘラツキ、工具痕	指ナデ	淡黄	良好	0.5-1.5mmの粒を含む		
*	21	SA1	高坏	胴部	タテのヘラツキ 工具痕	ヨコナデ、ヨコにヘラツキ 工具痕、指押さえ	黄 灰白	良好	0.1-1mmの粒を含む	外-内	
*	22	SA1	高坏	胴部	タテのヘラツキ 工具痕、風化著しい	横のヘラツキ 工具痕、ヨコナデ	淡黄	良好	0.1-1mmの粒を含む	外-内	
*	23	SA1	高坏	胴部	斜の丁家ナデ 工具痕	ヘラツキ工具のナデ 指ナデ	淡黄	良好	2.5mm以下の粒を含む	外-内	
8	24	SA2	窯	口縁-胴部下位	口縁-胴部下位、横、斜のナデ 胴部下位、ヨコナデ 胴部下位、平行タキ後ナデ	口縁-胴部下位 工具による斜のナデ後指ナデ 底部、ナデ	淡黄	良好	1-7mmの砂粒を含む	外-内	
*	25	SA2	窯	口縁-胴部下位	口縁-胴部下位、平行タキの後 胴部下位、平行タキ	胴部-指押さえ、ヨコナデ 胴部下位、ヨコナデ 胴部下位、下位、ナデ	灰青 淡黄	良好	0.5-8.5mmの砂粒を含む 15mmの砂粒を含む	外-内	
9	30	SA2	窯	口縁-胴部上位	口縁、ヨコナデ 胴部上位、平行タキ後ヨコナデ 胴部上位、平行タキ	口縁、ヨコナデ 胴部上位、ナデ	淡黄 灰黄	良好	2-6mmの砂粒を含む		
*	31	SA2	窯	胴部	口縁-胴部下位、横、斜のナデ 胴部下位、下位、ヨコナデ、ナデ 底部、ナデ	口縁-胴部下位、斜のナデ 胴部下位、下位、ヨコナデ、ナデ 底部、ナデ	淡黄 灰白	良好	3-7mmの砂粒を含む	外-内	
*	32	SA2	窯	胴部	口縁-ナデ 胴部-胴部下位、平行タキ後ナデ 底部、ナデ	口縁-底部、指ナデ 胴部下位、ナデ	淡黄 灰白	良好	1-3mmの砂粒を含む	外-内	
*	33	SA2	窯	ほぼ底部	口縁、ヨコナデ 胴部下位、縦工具による斜のナデ 底部、ナデ	口縁-胴部、斜のナデ 底部、指押さえ	淡黄 灰黄	良好	0.5-4mmの砂粒を含む	外-内	
*	34	SA2	窯	ほぼ底部	口縁、ナデ 胴部下位、ヨコナデ 胴部下位、平行タキ後ナデ	口縁-胴部下位、斜ナデ 胴部下位、下位、横、斜のナデ 胴部下位、ナデと指押さえナデ	淡黄 灰	良好	0.1-5.5mmの砂粒を含む	外-内	
10	35	SA2	窯	底部	口縁、ナデ 胴部下位、ヨコナデ 胴部下位、平行タキ後ナデ	口縁-胴部下位、ヨコナデ 胴部下位-底部、工具による斜のナデ、指押さえ	淡黄 灰白	良好	0.1-5mmの砂粒を含む	内-外	
*	36	SA2	窯	口縁-底部	口縁、ナデ 胴部、ナデ 風化著しい	胴部、ナデ、タテナデ 風化著しい	黄 淡黄	良好	0.5-3mmの砂粒を含む	外-内	
*	37	SA2	窯	底部	口縁、ヨコナデ 胴部-胴部下位、横、斜、縦のナデ 胴部下位、底部、指ナデ	口縁-胴部下位、横、斜、縦のナデ 胴部下位-底部、指ナデ	淡黄 灰	良好	0.5-8mmの砂粒を含む	外-内	
*	38	SA2	窯	底部	口縁、ヨコナデ 胴部-胴部下位、平行タキ後ナデ 胴部下位-底部、風化著しい	口縁、ヨコナデ 胴部下位、斜のナデ	灰青 淡黄	良好	0.5-3mmの砂粒を含む	外-内	
11	39	SA2	窯	口縁-胴部上位	口縁、ヨコナデ 胴部上位、斜のナデ	口縁、ヨコナデ 胴部上位、斜のナデ	淡黄	良好	0.5-7mmの砂粒を含む	外-内	

計画 番号	建物 番号	出土 地点	部 位	文 様 お よ び 調 整		色 調		構成	材 土	備考	
				外		内					
				外	内	外	内				
11	40	SA2	壁	口縁	口縁・ナゲ 口縁：ヨコナゲ後斜のナゲ	ナゲ、ヨコナゲ	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.5~4mmの砂粒を含む	
*	41	SA2	壁	口縁~胴部中位	口縁・ナゲ 口縁：ナゲ 胴部上位・中位・ナゲ	口縁、ヘラ状工具による条痕 口縁~胴部中位・ナゲ	暗灰	浅黄緑 浅黄緑	良好	0.5~4.5mmの砂粒を含む	内・黒炭
*	42	SA2	壁	胴部~胴部中位	ヨコナゲ 風化著しい	ナゲ 風化著しい	暗灰	黄緑	良好	0.1~3mmの砂粒を含む	内・外、黒炭 赤く付着
*	43	SA2	壁	胴部中位~底部	胴部中位~下位、ヨコナゲ 板状工具による条痕、斜のナゲ 底面：板状工具による、ナゲ、ヨコナゲ、風化著しい	胴部中位~底部・ナゲ 胴部下位、板状工具	黄緑	浅黄緑 灰白	良好	0.1~3mmの砂粒を含む	底部、黒炭
*	44	SA2	壁	胴部中位~底部	ナゲ 風化著しい	ナゲ	暗灰	黄緑 黄緑	良好	0.1~4mmの砂粒を含む	内、黒炭
*	45	SA2	壁	胴部下位~底部	平行タタキ後ナゲ	胴部下位・ヨコナゲ 底部、ヨコナゲ、板状工具	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1~4mmの砂粒を含む	内、黒炭
*	46	SA2	壁	胴部下位~底部	ナゲ	ナゲ	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.5~6mmの砂粒を含む	
*	47	SA2	壁	胴部下位~底部	胴部下位、平行タタキ後ナゲ 底部・ナゲ、指押さえ	胴部下位・ナゲ 底部・ナゲ、板状工具、指押さえ	灰白	浅黄緑	良好	0.1~5mmの砂粒を含む	内・黒炭
*	48	SA2	壁	胴部下位~底部	胴部下位、平行タタキ後ナゲ 底部・ナゲ、風化灰味	ナゲ	浅黄緑	黄灰	良好	5~6mmの砂粒を含む	内、黒炭
*	49	SA2	壁	底部	平行タタキ後ナゲ	ナゲ	浅黄緑	灰白	良好	0.5~3mmの砂粒を含む	
*	50	SA2	壁	胴部下位~底部	ナゲ	ナゲ	灰白	灰黄緑	良好	0.5~4mmの砂粒を含む	内、黒炭
*	51	SA2	壁	底部	縦斜のナゲ	ヨコ、タテのナゲ 工具痕	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.5~8mmの砂粒を含む	
*	52	SA2	壁	胴部下位~底部	胴部下位、平行タタキ後ナゲ 底部・ナゲ 底部：平行タタキ後ナゲ	タテナゲ	暗灰 浅黄緑	浅黄緑 浅黄緑	良好	1.0~5mmの砂粒を含む	内、黒炭
*	53	SA2	壁	胴部下位~底部	平行タタキ後ナゲ 風化灰味	胴部下位・ナゲ 底部・ナゲ	浅黄緑	黄灰 黄灰	良好	0.5~4mmの砂粒を含む	内、黒炭
*	54	SA2	壁	底部	ナゲ	板状工具による横、斜のナゲ 工具痕	淡黄緑	浅黄緑	良好	0.5~4mmの砂粒を含む	
*	55	SA2	壁	底部	ヨコナゲ 指押さえ ナゲ	板状工具によるナゲ	浅黄緑 黄緑	暗灰	良好	0.1~3mmの砂粒を含む	内・黒炭 あけ痕
*	56	SA2	壁	底部	ナゲ 指押さえ	ナゲ	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.5~3mmの砂粒を含む	あけ痕
*	57	SA2	壁	胴部下位~底部	指押さえ、ナゲ 風化著しい	風化著しい ナゲ	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1~3mmの砂粒を含む	あけ痕
*	58	SA2	壁	底部	ナゲ	斜のナゲ	浅黄緑	灰	良好	0.1~4.5mmの砂粒を含む	あけ痕
*	59	SA2	壁	文形	口縁~胴部、ヨコナゲ 胴部~胴部下位、ヨコナゲ 胴部、ヘナゲ	口縁~胴部、ヨコナゲ 胴部~底部、指押さえ、ヨコナゲ ヘナゲ、工具痕	浅黄緑 淡灰	黄灰 黄灰	良好	2mm以下の粒を含む	外、黒炭 赤く付着
*	60	SA2	壁	ほぼ完成形	口縁~胴部、ヨコナゲ 胴部~胴部下位、ヨコナゲ 胴部、ヘナゲ	口縁・ヨコナゲ 胴部~胴部下位、斜、指押さえ、ヨコナゲ 胴部、ナゲ、板状工具による工具痕	浅黄緑	浅黄緑	良好	1~4mmの粒を含む	外、黒炭 赤く付着
*	61	SA2	小竪壁	口縁~底部	口縁・ナゲ 口縁：指押さえ、斜のナゲ 胴部、ナゲ	口縁・ヨコナゲ 胴部、ヨコナゲ、指押さえ 底部、板状工具による工具痕	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1~2.5mmの粒を含む 7mmの塵を含む	赤く付着
*	62	SA2	窓	底部	ヨコナゲ 横にヘラミギキの痕ナゲ、指押さえ	ナゲ 指押さえ	黄緑 灰白	黄緑 にふい黄	良好	0.1~4mmの粒を含む	外、黒炭
13	63	SA2	壁	文形	口縁・ヨコナゲ 口縁~胴部、ヨコナゲ 胴部、ヘナゲ	口縁~胴部、斜、横ナゲ 胴部、ヘラ状工具によるヨコナゲ 胴部、タテのナゲミギキ、風化著しい ナゲ	暗灰 浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1~8mmの粒を含む	外、黒炭
*	64	SA2	壁	ほぼ完成形	口縁・ヨコナゲ 口縁~胴部上位、風化著しい 胴部、ヨコナゲ	口縁~胴部、ヨコナゲ、風化灰味 胴部、指押さえ 底部、ヨコナゲ	浅黄緑	浅黄緑 灰	良好	0.1~3mmの粒を含む	外、黒炭 赤く付着
*	65	SA2	窓	口縁~胴部	口縁・ヨコナゲ 口縁~胴部、横、斜のナゲ	口縁、横、斜のナゲ 胴部、工具痕、ヨコナゲ	灰 浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1~3mmの粒を含む	外、黒炭
*	66	SA2	窓	胴部~底部	胴部、斜のナゲ 胴部下位~底部、横、斜のナゲ	胴部、ヨコナゲ 胴部下位~底部、斜のナゲ	黄緑 黄緑	黄緑	良好	0.1~3mmの粒を含む	外、黒炭
*	67	SA2	窓	胴部~胴部下位	風化著しい	風化著しい 斜、横のナゲ	暗灰	暗	良好	0.1~2mmの粒を含む	外、黒炭 赤く付着
*	68	SA2	壁	胴部	横、斜のナゲ 斜のハケ目	横、斜のナゲ 板状工具による横、斜のナゲ	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1~6mmの粒を含む	外、黒炭 赤く付着
*	69	SA2	鉢	文形	風化著しい	風化著しい	暗	暗	良好	0.1~2mmの粒を含む	内・黒炭
*	70	SA2	鉢	文形	口縁・ヨコナゲ 胴部、横、斜のナゲ 底面、ナゲ	口縁~胴部下位・ヨコナゲ 底部・ナゲ	暗	にふい黄	良好	0.1~1.5mmの粒を含む	外、黒炭 赤く付着 赤く付着
*	71	SA2	坪	口縁~底部	口縁~胴部上位、ヨコナゲ 胴部中位~底部・ナゲ	ヨコナゲ	浅黄緑	浅黄緑 黄灰	良好	3mm以下の粒を含む	内、黒炭
*	72	SA2	高坪	坪部	丁床のナゲ 風化著しい	ヨコナゲ	浅黄緑	浅黄緑 暗灰	良好	7mm以下の粒を含む	内、黒炭
*	73	SA2	高坪	坪部	ヨコナゲ、風化著しい	ヨコナゲ、風化著しい	黄緑	黄緑	良好	0.1~2mmの粒を含む	
*	74	SA2	高坪	坪部	斜のヘラミギキ 風化灰味	風化著しい	暗	灰黄緑	良好	0.5mm以下の粒を含む	

試体番号	遺物番号	出土地点	器種	部位	文様および装束		色調		産地	胎土	備考
					外	内	外	内			
12	76	SA3	高坏	坏部	ヨコナテ, 風化気味	ヨコナテ, 風化気味	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1-1mmの粒を含む	
*	76	SA3	高坏	坏部	ヨコナテ, 風化著しい	風化著しい, ヨコナテ	浅黄緑 にぶい黄緑	にぶい黄緑 黄緑	良好	0.1-2mmの粒を含む	
*	77	SA3	高坏	坏部	ヨコナテ, 風化気味	ヨコナテ, 風化気味	淡緑	淡緑	良好	0.1-2mmの粒を含む	
*	78	SA3	高坏	坏部	ヨコナテ, 風化著しい	風化著しい, ヨコナテ	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1-2.5mmの粒を含む	
*	79	SA3	高坏	坏部	風化著しい ヨコナテ	風化著しい ヨコナテ	浅黄緑 にぶい黄	浅黄緑	良好	0.1-2.5mmの粒を含む	内・黒炭
*	80	SA3	高坏	坏部	ヨコナテ 風化著しい	ナテ 風化気味	黄 浅黄緑	黄 浅黄緑	良好	2mm以下の粒を含む	
*	81	SA3	高坏	坏部	風化気味 ナテ	風化気味 ナテ	浅黄緑 オリーブ灰	浅黄緑 オリーブ灰	良好	0.1-2mmの粒を含む	
*	82	SA3	高坏	坏部	ヨコナテ 風化気味	ヨコナテ 風化気味	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1-1mmの粒を含む	
*	83	SA2	高坏	坏部	ヨコナテ 風化著しい	風化気味 ヨコナテ	浅黄緑 褐色	灰黄緑 褐色	良好	0.1-2mmの粒を含む	外・黒炭
*	84	SA2	高坏	坏部	ヨコナテ	ヨコナテ	浅黄緑	淡黄	良好	1mm以下の粒を含む	
13	85	SA2	高坏	坏部	風化気味 ヨコナテ	風化気味 ヨコナテ	浅黄緑 灰白	浅黄緑 灰	良好	0.1-2mmの粒を含む	内・黒炭
*	86	SA2	高坏	坏部	ヨコナテ 斜のナテ	ヨコナテ 斜のナテ	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.5-2mmの粒を含む	
*	87	SA3	高坏	坏部	口縁・ヨコナテ 坏部・丁寧なナテ, 指押さえ	ヨコナテ, 工具 丁寧なナテ	浅黄緑 褐色	浅黄緑	良好	0.5-3.5mmの粒を含む	外・黒炭
*	88	SA2	高坏	坏部	ナテ	ナテ	浅黄緑	浅黄緑	良好	2mm以下の粒を含む	
*	89	SA2	高坏	坏部	ナテ 風化気味	ナテ	浅黄緑	淡緑	良好	0.1-1mmの粒を含む	
*	90	SA2	高坏	坏部	ナテ	ヨコナテ	黄緑	浅黄緑	良好	2.5mm以下の粒を含む	
*	91	SA2	高坏	坏部	ヨコナテ 風化気味	風化著しい ヨコナテ	浅黄緑	浅黄緑 灰白	良好	0.1-1.5mmの粒を含む	
*	92	SA2	高坏	坏部	ヨコナテ	横, 縦ナテ	浅黄緑 褐色	浅黄緑	良好	0.1-1mmの粒を含む	外・黒炭
*	93	SA2	高坏	坏部	ヨコナテ 風化著しい	ヨコナテ 風化著しい	黄緑	浅黄緑	良好	0.1-1mmの粒を含む	
*	94	SA2	高坏	脚部	縦のヨコナテ 縦のヨコナテ, 工具痕	脚部・ヨコナテ 縦の縦なヨコナテ	浅黄緑	にぶい黄緑	良好	0.1-2mmの粒を含む	外・つ引
*	95	SA2	高坏	脚部	縦のヘラミガキ後ナテ 横ナテ	ヨコナテ	にぶい黄	浅黄緑	良好	0.1-1.5mmの粒を含む	外・黒炭
*	96	SA2	高坏	脚部	ヨコナテ	指押さえ, ヨコナテ 工具による縦ナテ	淡緑 明褐色	淡緑	良好	0.1-2mmの粒を含む	
*	97	SA2	高坏	脚部	風化著しい	ヨコナテ 風化著しい	浅黄緑 黄	淡緑	良好	0.1-1mmの粒を含む	
*	98	SA2	高坏	脚部	縦のヘラミガキ 風化気味	風化著しい	淡黄	浅黄緑	良好	2-5mmの粒を含む	
*	99	SA2	高坏	脚部	縦のヘラミガキ後 指押さえ	工具痕 横斜のナテ	浅黄緑	黄	良好	0.1-2mmの粒を含む	外・黒炭
*	100	SA2	高坏	脚部	縦のヘラミガキ	工具による縦ナテ 工具痕	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1-3.5mmの粒を含む	
*	101	SA2	高坏	脚部	風化著しい	ナテ ヨコナテ	にぶい黄 浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1-4mmの粒を含む	
*	102	SA2	高坏	脚部	タテのヘラミガキ 風化気味, 工具痕	縦, 斜のナテ 風化著しい	黄緑	浅黄緑	良好	0.1-2mmの粒を含む	
*	103	SA2	高坏	脚部	タテのヘラミガキ	工具痕, 斜のナテ タテの指ナテ	浅黄緑 黄緑	黄緑	良好	0.1-2mmの粒を含む	
*	104	SA2	高坏	脚部	斜のナテ 全体的に風化気味	斜のナテ 全体的に風化気味	黄緑	浅黄緑	良好	0.5-4mmの粒を含む	
*	105	SA2	高坏	脚部	ヨコナテ斜のナテ タテのヘラミガキ	タテのナテ 縦, 横のナテ	浅黄緑	黄緑	良好	0.1-2mmの粒を含む	
*	106	SA2	高坏	脚部	タテのヘラミガキ	風化著しい	浅黄緑	淡黄	良好	0.1-2mmの粒を含む	外・黒炭
*	107	SA2	高坏	脚部	工具痕, タテのヘラミガキ 風化気味	縦なヨコナテ タテの工具痕	黄	浅黄緑	良好	0.1-1mmの粒を含む	
*	108	SA2	高坏	脚部	ナテ 風化著しい	工具痕, ヨコナテ 風化気味	淡緑	淡緑	良好	1-2mmの粒を含む	
*	109	SA2	高坏	脚部	ナテ 風化気味	ヨコナテ 工具痕	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1-3mmの粒を含む	

採掘 番号	出土 地点	器種	部位	文 様 お よ び 調 整		色 調		織成	胎 土	備考	
				外	内	外	内				
14	121	B3G a層	妻	胴部-胴縁上段	ヨコナゲ 風化気味	胴部・ヨコナゲ 胴縁上段・ナゲ	浅黄	浅黄緑	良好	0.1-2mmの粒を 含む	
*	122	A3G a層	妻	口縁	口縁・ヨコナゲ,風化著しい	ヨコナゲ,風化著しい	橙	橙	良好	0.1-1mmの粒を 含む	
*	123	a-1層	妻	口縁	ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰白	黄緑	良好	2mm以下の粒を 含む	
*	124	a-1層	妻	口縁	ヨコナゲ	ヨコナゲ	浅黄緑	浅黄緑	良好	2mm以下の粒を 含む	
*	125	B3G	妻	口縁	惣合ヨコナゲ 風化気味	惣合ヨコナゲ 風化気味	淡水色	淡黄	良好	2mm以下の粒を 含む	
*	126	B3G	妻	口縁	ナゲ, 風化気味	ナゲ, 風化気味	橙	にぶい橙	良好	0.1-2mmの粒を 含む	
*	127	B3G	妻	口縁	ヨコナゲ 風化気味	横, 斜ナゲ	灰白	浅黄緑	良好	0.1-2mmの粒を 含む	
*	128	a-1層	妻	胴部	斜のナゲ 2本の線刻	斜のナゲ	橙	黄灰	良好	0.1-2mmの粒を 含む	
*	129	B3G	妻	底部	胴部下段・字付タタキ 底部・ナゲ	ナゲ, 工具痕	淡黄	浅黄緑	良好	1-5mmの粒を 含む	おび度
*	130	a-1層	妻	胴部下段-底部	胴部下段・縦, 横ナゲ 底部・ナゲ	胴部下段・斜のナゲ 底部・指押さえ, 工具痕	にぶい黄緑 灰黄緑	浅黄緑 にぶい黄 緑	良好	0.5-4mmの粒を 含む	
*	131	B3G a層	妻	口縁	ナゲ, 風化気味	ナゲ, 風化気味	浅黄緑	黄緑	良好	0.1-2mmの粒を 含む	
*	132	B3G a層	妻	口縁	ナゲ, 風化気味	ナゲ, 風化気味	浅黄緑 灰白	浅黄緑	良好	1mm以下の粒を 含む	
*	133	B3G	鉢	口縁	ヨコナゲ	ヨコナゲ	黄灰 明黄緑	明黄緑	良好	0.1-2mmの粒を 含む	外-黄灰
*	134	SC18	高坏	坏部	風化著しい ヨコナゲ	風化著しい ヨコナゲ	浅黄緑 明黄灰	浅黄緑	良好	0.1-2mmの粒を 含む	
*	135	SE1	高坏	坏部	横, 斜のナゲ 風化気味	ヨコナゲ 風化気味	橙	橙	良好	0.1-2mmの粒を 含む	
*	136	SC22	高坏	坏部	ヨコナゲ	ヨコナゲ	黄緑	浅黄緑	良好	2mm以下の粒を 含む	外-黄灰
*	137	SC24	高坏	坏部	ヨコナゲ	風化気味 ヨコナゲ	浅黄緑 淡黄	淡黄	良好	0.1-0.5mmの粒を 含む	
*	138	a-1層	高坏	脚部	風化気味 斜のヘラミガキ後ヨコナゲ	工具痕, ヨコナゲ	にぶい橙	にぶい橙	良好	0.1-1.5mmの粒を 含む	外-2層
*	139	SC21	高坏	脚部	ナゲ	ヨコナゲ	浅黄緑	浅黄緑	良好	1mm以下の粒を 含む	
*	140	a-1層	高坏	脚部	ヨコナゲ, 風化気味 タナにミガキ痕	工具痕 ヨコナゲ	浅黄緑	淡黄	良好	2mm以下の粒を 含む	
*	141	a-1層	高坏	脚部	風化気味 タナのヘラミガキ後ヨコナゲ	ヘラ状工具によるナゲ ヨコナゲ	浅黄緑 黄灰	浅黄緑	良好	1-2mmの粒を 含む	外-黄灰
*	142	A3G a層	高坏	脚部	風化気味, ナゲ	風化気味, ナゲ	浅黄緑	橙	良好	0.5-5mmの粒を 含む	
*	143	a-1層	高坏	脚部	横, 斜のナゲ	縦, 横のナゲ	浅黄緑	浅黄緑	良好	2mmの粒を含む	
*	144	SE2	高坏	脚部	ヨコナゲ	タテナゲ, 斜のナゲ ヨコナゲ	橙 黄緑	橙	良好	0.1-2mmの粒を 含む	
*	145	a-1層	高坏	脚部	ヨコナゲ, 風化著しい	タテの指ナゲ ナゲ	浅黄緑	浅黄緑	良好	0.1-1.5mmの粒を 含む	
*	146	SC18	高坏	脚部	ナゲ	風化気味	黄緑	黄緑	良好	0.1-1mmの粒を 含む	
*	147	a-1層	高坏	脚部	風化気味, ナゲ	風化著しい	灰白	浅黄緑 淡黄	良好	1mm以下の粒を 含む	
*	148	a-1層	高坏	脚部	斜の指ナゲ 風化気味, ナゲ	風化気味, ナゲ	浅黄緑	にぶい橙	良好	1-2mmの粒を 含む	
*	149	SC22	高坏	脚部	斜のナゲ, ヨコナゲ	ヨコナゲ	淡黄	浅黄緑 灰黄緑	良好	2mm以下の粒を 含む	
*	150	SC7	高坏	坏部	風化著しい	ナゲ	浅黄緑	浅黄緑	良好	3mm以下の粒を 含む	

土 錘 計 測 表

国番号	遺物番号	出土地点	器種	法量 (cm)			色 調	胎 土	焼成	備 考
				現長 (cm)	最大径 (cm)	重 (g)				
13	110	SA2	土錘	2.1	1.2	1.5	橙	0.1mmの粒を含む	良好	
14	151	a-1層	土錘	3.0	3.3	36.5	にぶい橙	0.1~0.5mmの粒を含む	良好	水貫通
*	152	a-1層	土錘	3.7	1.6	5.9	淡黄	0.1~0.5mmの粒を含む	良好	
*	153	a-1層	土錘	3.7	1.4	5.9	褐色にぶい橙	0.1~0.5mmの粒を含む	良好	
*	154	CAG	土錘	4.0	1.9	11.3	黄橙	0.1~3mmの粒を含む	良好	

石 器 計 測 表

国番号	遺物番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
6	24	SA1	磨石	16.5	7.5	3.7	646.6	砂岩	
*	25	SA1	磨石	15.1	7.7	6.4	1125	砂岩	
*	26	SA1	磨石	20.9	7.0	5.9	1330	砂岩	
*	27	SA1	磨石製品	15.0	9.7	5.7	202.0		
13	111	SA2	磨石	12.0	10.5	5.7	1085	砂岩	
*	112	SA2	磨石	9.7	8.8	4.6	367.7		
*	113	SA2	磨石	9.4	4.2	3.4	201.7	砂岩	
*	114	SA2	磨石	8.5	7.9	4.0	385.4	砂岩	
*	115	SA2	磨石	9.5	9.0	4.0	481.6	砂岩	
*	116	SA2	磨石	15.9	7.7	3.6	660.3	砂岩	
*	117	SA2	磨石	6.7	5.0	5.3	412.1		
*	118	SA2	磨石	8.7	6.7	4.0	349.4		
*	119	SA2	磨石	6.5	4.3	4.1	203.1	砂岩	
*	120	SA2	磨石	12.2	6.4	4.4	425.1	砂岩	
15	165	一括	石皿	17.2	23.3	5.0	2810	砂岩	側面・赤変

第IV章 古代から近代の遺構と遺物

第1節 屋敷遺構

1 高岡籠の特徴

高岡籠は藩境に位置し、そこには厳しい関所「去川の関」があった。それを守護する政府が置かれた籠で主要な籠113箇所の中でも大規模で重要な籠であった。

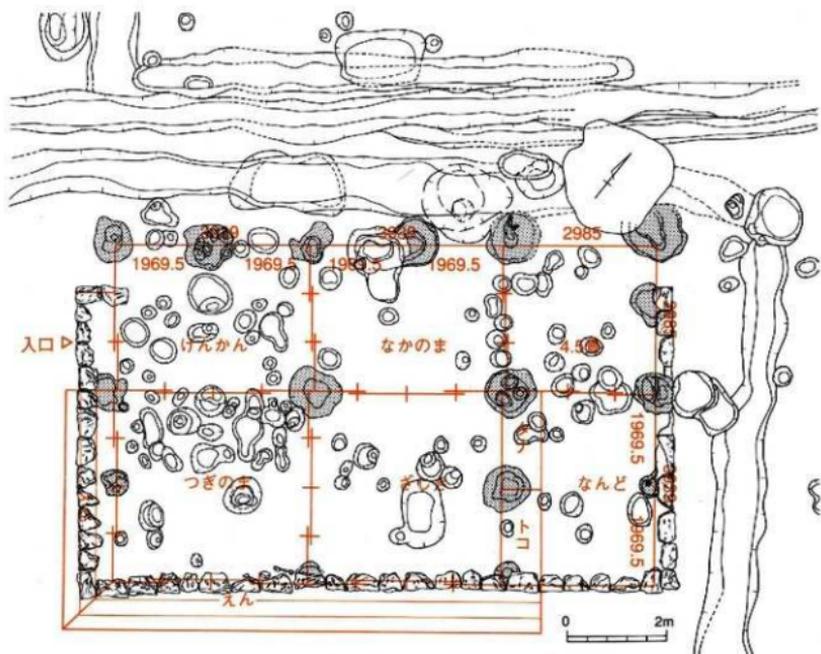
高岡籠は、慶長5年(1600)から翌6年春にかけて造られた。佐土原と結ぶ重要な街道筋に存在するため、このように短期間に籠を造ったという。武士の集住地は普通造成して街道より敷地を高くするために高低差のある部分に土留石をいれた。それが石垣であるが、高岡籠の場合は造成することなく平地に宅地割・街路計画を行なっているので高低差もなく石垣もみられない。そのかわりにいつも武器として備えのできる小竹を街道と敷地境に植えたという。現在でもこのような遺構がみられる。

高岡籠には、伊集院から99戸、鹿児島から21戸、市来から19戸をはじめ各地から移住してきている。これらのことについては他の籠と比べて珍しいことではないが、禄高の多い武士が多勢集まっていることが特徴である。つまり武士を駐屯させておく前線基地の役割があったといえる。

2 屋敷遺構

本遺跡の屋敷遺構は、第17図のとおりである。

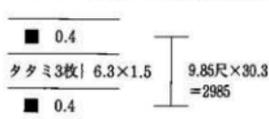
屋敷遺構を検出した所ははじめ雑草と大きな石(長幅約40~50cm程)が転がっている荒地であった。



第16図 屋敷間取り図 (1/100)

重機で約15cm程表土を除去すると、たて約50cm、よこ約30cm、高さ約30cmの長方形の切り出し石が「コ」の字型に配列してある石垣が検出された。石垣は東西に約12m、南北に約6.4mである。東側中央部に一部石垣のない部分がある。理由については明らかではないがSC14を掘り込む時に崩された可能性が考えられる。さらに石垣内を精査すると礎石根石跡が16箇所検出された。根石は穴を掘込み砂岩の礫を詰め込んだ後突き固められているため表面は小礫と小礫の間にシラス質の土が入り込み礫が固定されている。下層は人頭大程の礫が詰められている。

第16図の屋敷間取り図は土田充義氏（鹿児島大学工学部）に作成して頂いたものである。この復元にあたって次のことが推定されている。

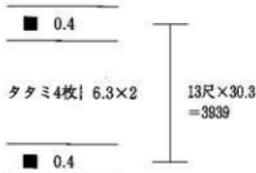


1：畳（6.3尺×3.15尺）の大きさに合わせて柱を立てた。

$$(6.3尺 \times 1.5間 + 0.4尺柱の幅) \times 30.3 = 2985mm$$

$$(6.3尺 \times 2間 + 0.4尺柱の幅) \times 30.3 = 3939mm$$

2：接客空間を中心とした遺構で柱真が合っている。



現在の敷地内への出入口は北側に位置するが、当時は屋敷の南から東側を流れる当時の飯田川からその上の里道に上がり南側から敷地内に入りしていたと考えられる。そして身分の高い人はそのまま縁側から入っていたと思われる。また北側は作業場や生活の場で、武士の顔（南側）と農民の顔（北側）の二面性をもつ屋敷であったことが想定される。また、敷地内に転がっていた大石は表土と共に除去してしまっただが、根石の上の台石であったことが推定される。

第2節 土 壇

1 概 要

土壇のほとんどが瓦や陶磁器、鉄滓等を廃棄するために掘られたものである。表土を剥ぎ遺構検出を行なったが同一面で古代、近世、近・現代の遺構が複雑に切り合っていた。土壇として取り上げたものは28基である。

2 遺構と出土遺物

SC1（第18図）……調査区の南西側で検出した楕円形プランの土壇である。覆土中より陶磁器、鉄滓、瓦片、フイゴの羽口等が出土している。

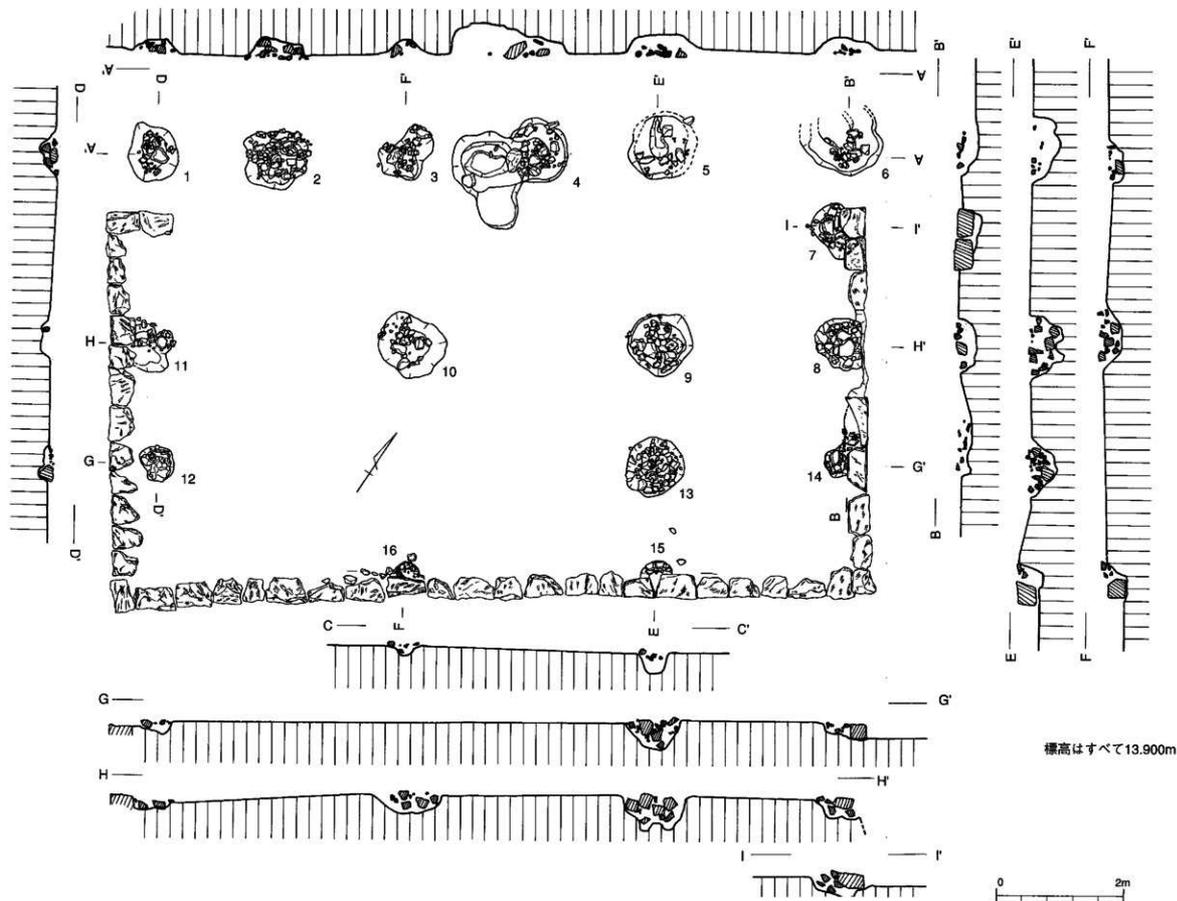
出土遺物（第24図）……1は肥前染付の大皿で外面に唐草文、内面に牡丹文かを描く。内面に下絵付けのためか透明の線が描かれており、一部に金箔や朱色が付着している。18世紀後半。2は肥前染付青磁で唐草文を描く。18世紀後半。

SC3（第18図）……調査区の西側で検出した楕円形プランの土壇である。土壇というより炭化物と焼土が含まれた覆土のたまった落ち込みである。陶磁器、土器、須恵器片が出土している。

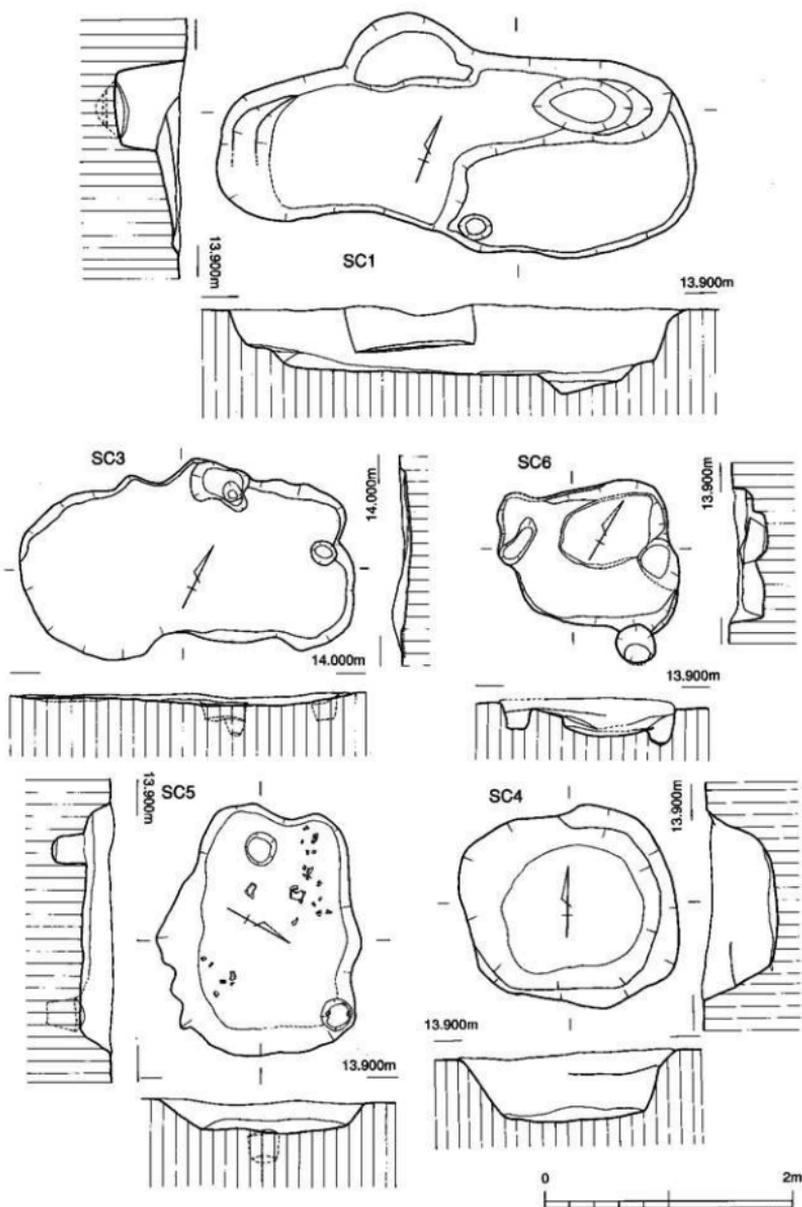
SC4（第18図）……調査区の北西側で検出した円形プランの土壇である。覆土中からは陶磁器、土器片、鉄滓等を出土している。

出土遺物（第24図）……3は肥前染付の筒形碗で外面に氷裂文と菊花散らし、見込みに五弁花文を描く。

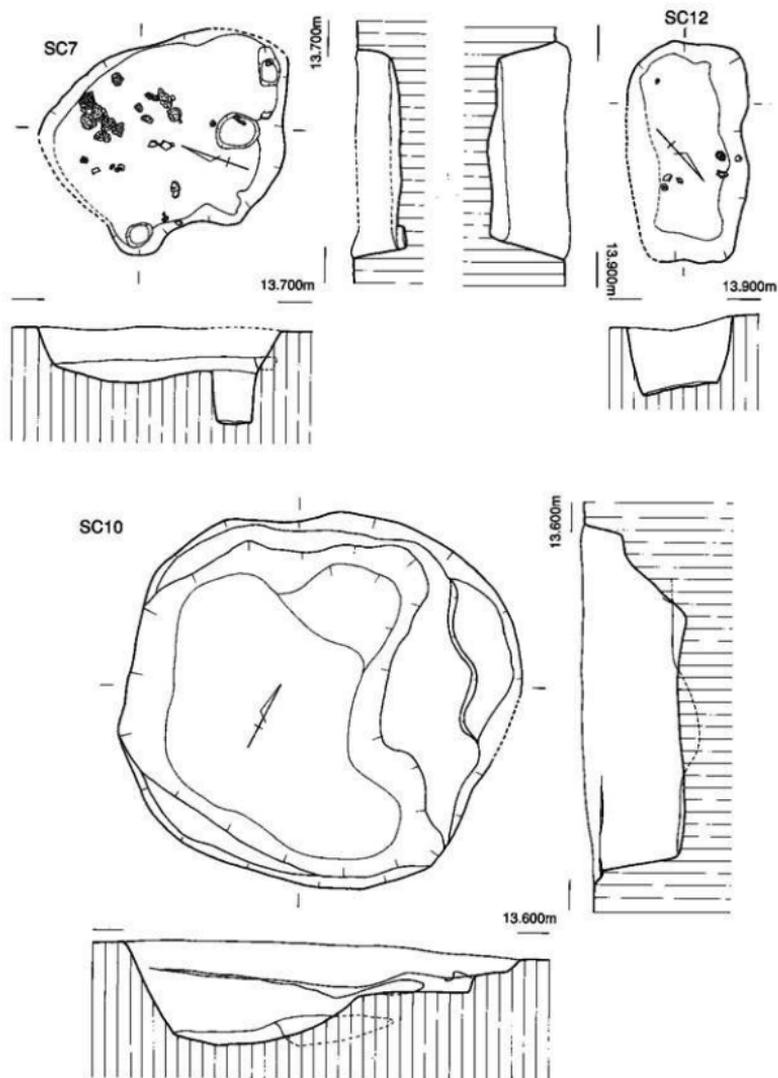
SC5（第18図）……調査区の北西側で検出した隅丸長方形プランの土壇である。覆土中からは陶磁器、銭貨（寛永通宝）、土器片を出土している。



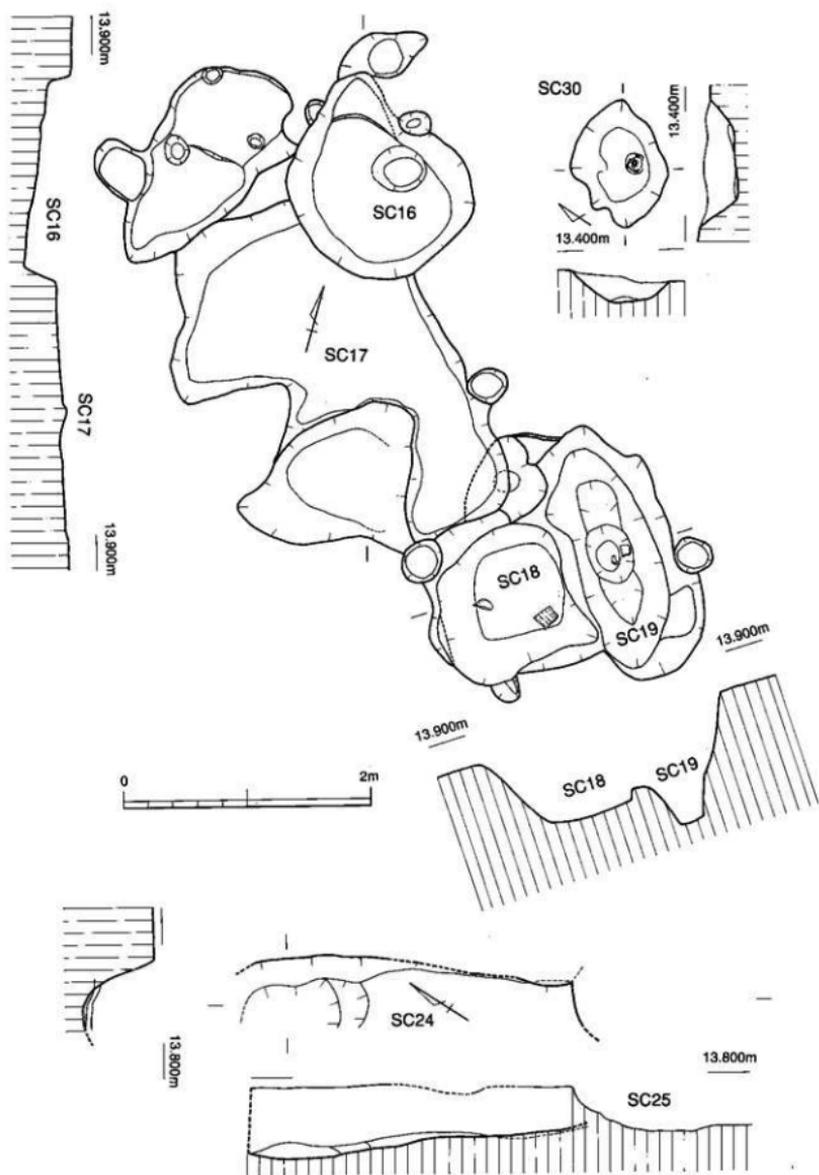
第17図 石垣及び礎石配置図 (1/80)



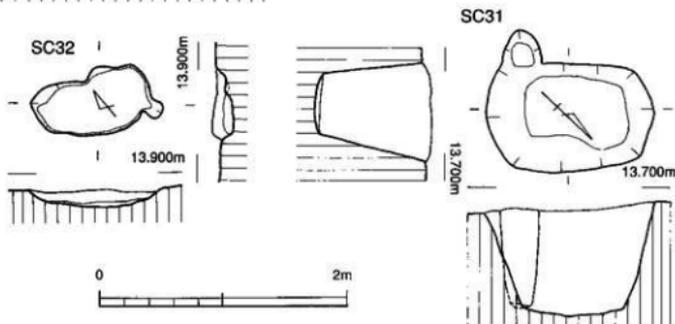
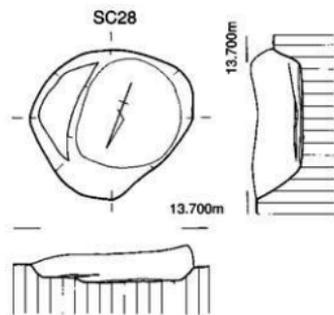
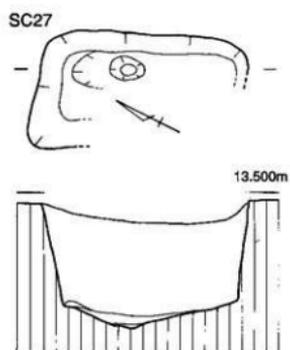
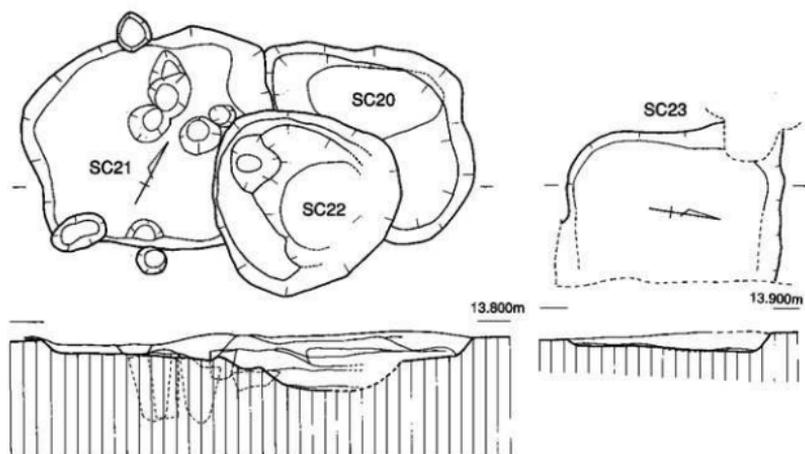
第18図 SC1・SC3・SC4・SC5・SC6 (1/40)



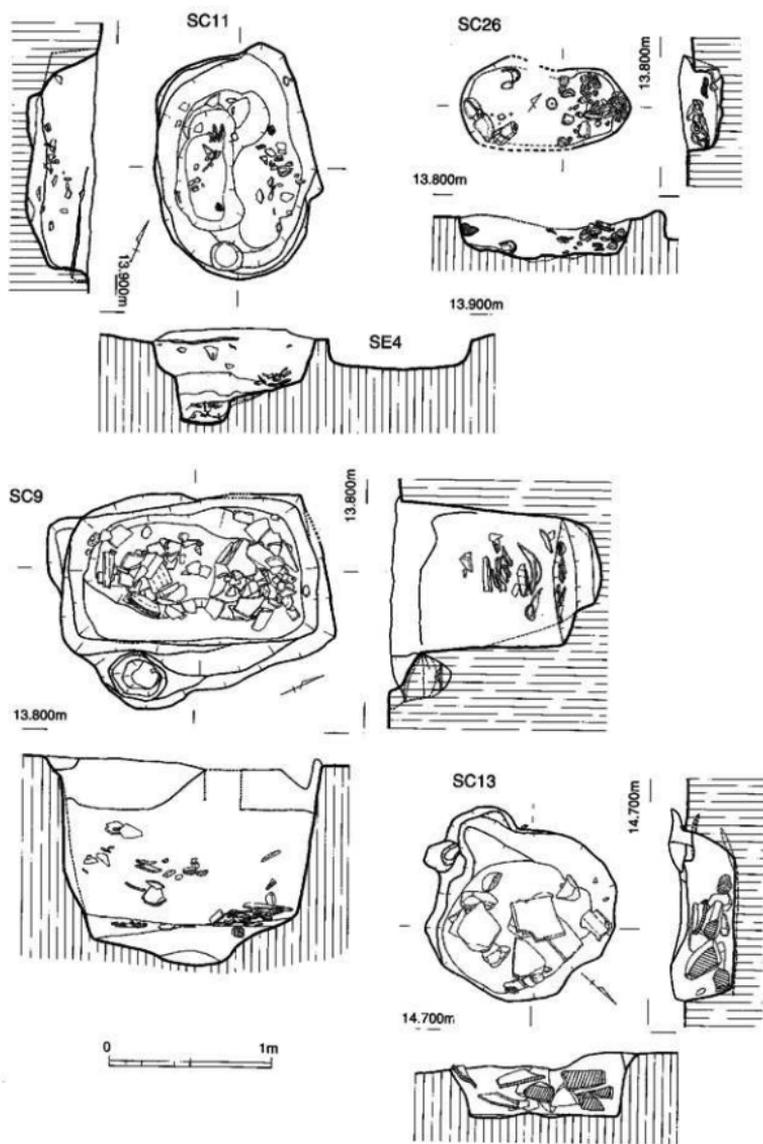
第19圖 SC7・SC10・SC12 (1/40)



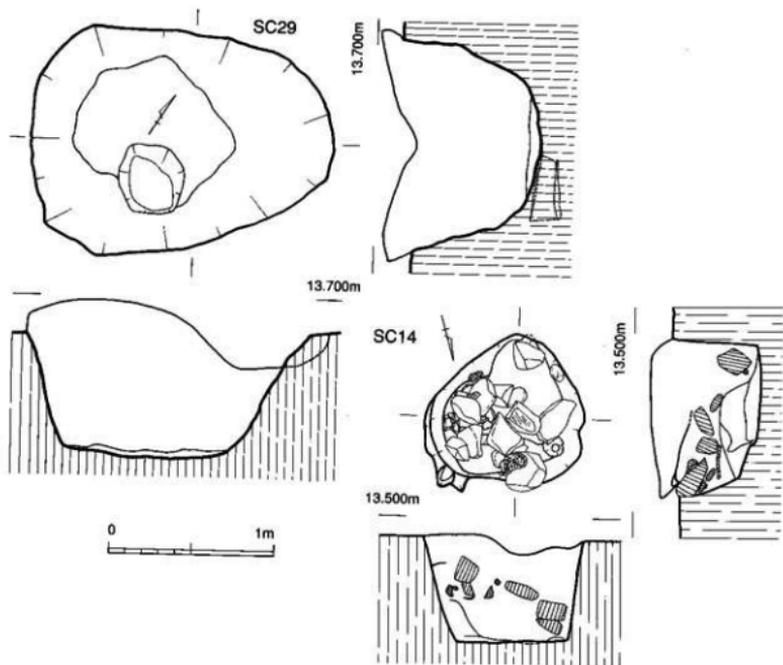
第20図 SC16・SC18・SC19・SC24・SC25・SC30 (1/40)



第21圖 SC20・SC21・SC22・SC23・SC27・SC28・SC31・SC32 (1/40)



第22図 SC9・SC11・SC13・SC26 (1/30)



第23図 SC14・SC29 (1/30)

出土遺物 (第24図) …… 4 は肥前染付の蓋物碗の蓋で発色不良の製品である。18世紀後半～19世紀初頭。5 は肥前染付の皿で長崎県波佐見系のものである。内面に唐草文が描かれている。18世紀後半。

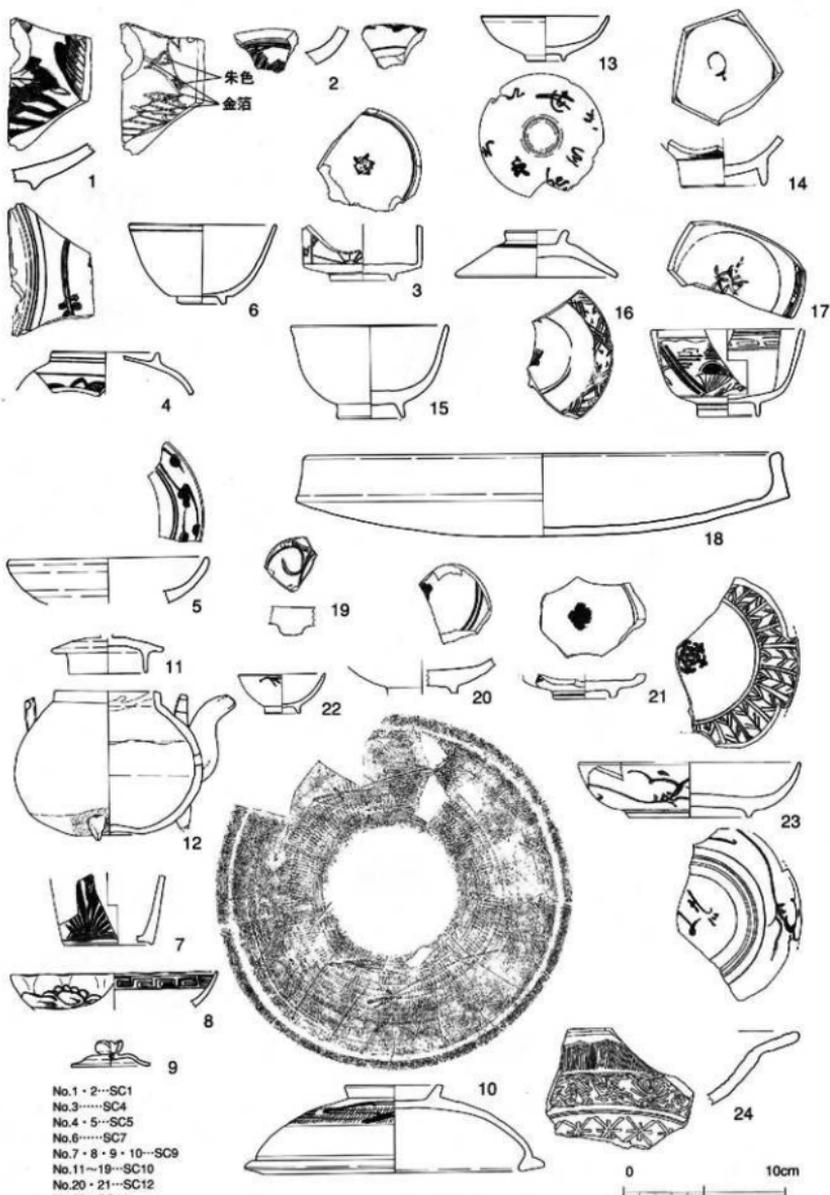
SC 6 (第28図) …… 調査区の西側で検出された不整楕円形プランの土壌である。覆土中からは陶磁器、瓦片、土器片、鉄滓等が出土している。

SC 7 (第19図) …… 調査区の中央北側で検出され、不整円形プランを呈する。覆土中からは陶磁器、鉄滓、瓦塔・瓦堂片、フイゴの羽口、古墳時代の土器等が出土している。

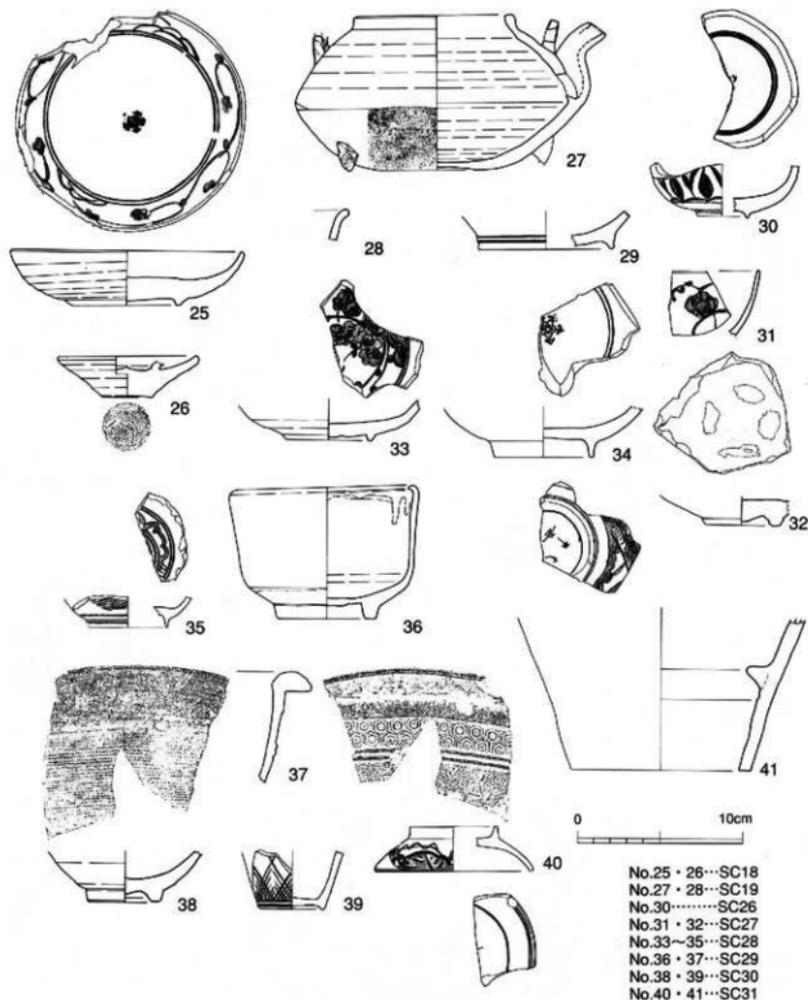
出土遺物 (第24図) …… 6 は関西系の陶器碗で外内面とも透明釉が施され、貫入がはいっている。18世紀後半～19世紀初頭。

SC 9 (第22図) …… 調査区のほぼ中央にある井戸の北側で検出された長方形プランの土壌である。覆土中からは陶磁器、瓦、鉄滓、フイゴの羽口、土器、須恵器、ガラス片等が出土している。

出土遺物 (第24図) …… 7 は肥前染付の猪口で外面に草花文が描かれている。18世紀中葉～末。



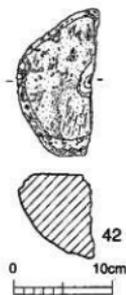
第24图 SC出土遺物実測図(1/3)



第25図 SC出土遺物実測図 (1/3)

8は肥前系の染付け皿で、外面に草花のような文様、内面に雷文が描かれる。19世紀初頭～幕末。9は関西系の陶器で急須等の蓋である。前面無釉でつまみ内に白土が塗られている。10も関西系の陶器で行平鍋の蓋である。外面は鉄釉が帯状に塗られ体部上部にトビカンナ目がついている。また、その上から白土が筋状に垂らされ、内面は透明釉が施されている。19世紀頃。

SC10 (第19図) ……調査区の北西側で検出された円形プランの土壌である。覆土中からは陶磁器、



第26図 SC13出土軽石製品実測図
(1/5)

瓦、瓦塔・瓦堂片、フイゴの羽口、かなり多くの鉄滓、土器、須恵器等が出土している。また、食用としたものか動物の骨が出土した。

出土遺物(第24図)……11と12は土瓶の蓋と本体でセットをなす。どちらとも外面は鉄釉が施され、内面は無釉である。本体は注ぎ孔が3つ、三足付きで在地産のものと思われる。13は肥前染付の紅皿で外面に「大阪新町お(御)笹紅」の文字がある。18世紀中葉～末。14は肥前染付の広東碗で見込みに「寿」字がある。19世紀前半。15は肥前陶器碗で外面は鉄釉、内面と高台内は透明釉がかけられ見込みは蛇ノ目釉割ぎになっている。1820～1860年代。16は青磁染付の蓋で内面にコンニャク印判による五弁花文と四方樺文がみられる。口唇部内外に漆が付着している。17は肥前染付の端反り碗で外面は扇面文、内面は竹文が描かれている。1820～1860年代。18は土師質の焙烙で底部は外型づくりである。体部との境は鋭く稜をなし、外内面ともナア仕上げ。19は肥前青磁

の皿で内面にヘラ描き文がある。高台に砂目が付着し壘付は露胎である。1630～1640年代。

SC12(第19図)……調査区の中央部、SE1の上に掘り込まれた長方形プランの土壌である。覆土中からは陶磁器、鉄滓、土師器等が出土している。

出土遺物(第24図)……20は肥前青磁染付の碗で見込みに五弁花文がある。18世紀後半。21は肥前青磁染付の碗で見込みに五弁花文、見込みと壘付きに砂目が付着している。18世紀後半。

SC13(第22図)……調査区の東側で検出された円形プランの土壌である。覆土中からは陶磁器、瓦、フイゴの羽口、鉄滓、土師器、須恵器等が出土している。近・現代の遺構と思われる。

SC14(第23図)……石垣の東側で検出され礎石を壊して掘り込んだ円形プランの土壌である。覆土中から陶磁器、瓦、フイゴの羽口、鉄滓、ガラス片、瓦塔・瓦堂の小片等が出土している。

出土遺物(第24図)……22は肥前系の染付小坏で外面に笹文を描く。18世紀後半～19世紀初頭。

SC16(第20図)……調査区の北側で検出された不整円形プランの土壌である。陶磁器片、土器片、鉄滓が出土している。

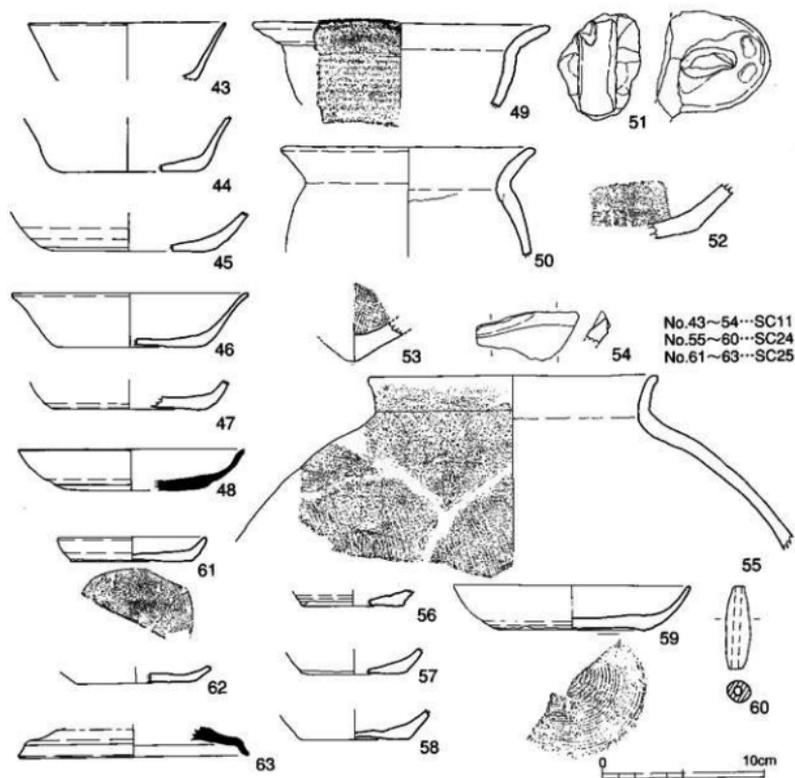
SC17(第20図)……SC16の南側に広がる焼土と炭がかなり多く含まれた覆土の浅い落ち込みである。陶磁器、瓦片、鉄滓、土器、須恵器が出土している。

出土遺物(第24図)……23は肥前染付の皿で外面に唐草文、内面に矢羽根文と見込みにコンニャク印判による五弁花文、高台内に「大名年製」の文字がある。18世紀前半か後半である。24は肥前陶器の三鳥手の鉢で外面は鉄釉と灰緑色釉、内面は象嵌で白化粧を塗った後に透明釉が施されている。18世紀頃である。

SC18・19(第20図)……それぞれSC17の南側で検出された土壌で切り合いは不明である。覆土中からは陶磁器、鉄滓、土器、須恵器が出土している。

出土遺物(第25図)……25は肥前染付の波佐見系の皿である。内面に唐草文、見込みにコンニャク印判による五弁花文があり見込みは蛇ノ目釉割ぎがされている。18世紀後半。26は陶器製の灯明皿で内面に泥釉が施されている。底部は糸切りで在地産か。18世紀～19世紀。27は土瓶で外面はカキ目調整が施され、白化粧土の上から緑釉がかけられている。三足付きで注ぎ孔は1つ。28は中国産の青磁端反り碗で14世紀後半～16世紀中葉。29は肥前染付の壺である。

SC20・21・22(第21図)……調査区の北側で検出された不整円形プランの土壌で、3つが切り合っ



No.43~54…SC11
No.55~60…SC24
No.61~63…SC25

第27図 SC出土遺物実測図(1/3)

ている。SC20→SC21→SC22の順に掘り込まれたと思われる。それぞれ陶磁器、瓦片、鉄滓、須恵器、土器等が出土し、SC22からは瓦塔・瓦堂の小片、フイゴの羽口片が出土している。

SC23(第21図)……井戸の西側に検出された隅丸長方形プランの土壌で井戸の掘り込みに切られている。覆土からは陶磁器、鉄滓、フイゴの羽口片、土器等が出土している。

SC26(第22図)……SE3の上に掘り込まれた楕円形プランの土壌で陶磁器や特に鉄滓とフイゴの羽口が多く出土している。

出土遺物(第25図)……30は肥前染付の湯呑み碗で外面に芭蕉葉文が描かれる。1780~1820年代。

SC27(第21図)……SE3の西端部の上に掘り込まれた隅丸長方形プランの土壌で瓦片、陶磁器、鉄製品、ガラス片、プラスチック製の櫛等が出土している。近世の遺物も出土しているが、新しい土壌である。

出土遺物(第25図)……31は肥前系の染付碗で、外面に梅文を描く。18世紀後半。32は嬉野内野山窯産の肥前陶器皿で透明釉が施され内面の一部が銅で緑彩されている。1610~40年代。

S C 28 (第21図) ……調査区の西側で検出された円形プランの土壌である。覆土中からは陶磁器、土器が出土している。

出土遺物 (第25図) ……33は肥前染付の皿で内面に梅文を描く。1620～40年代。34は肥前染付の碗で、見込みにコンニャク印判による五弁花文、高台内に「大(明)年製」を記す。18世紀前半。35は中国産染付の万頭心型の碗で外面に水文?内面に団龍文を描く。16世紀後半。

S C 29 (第23図) ……S E 3の直下に掘り込まれた不整形円形プランの土壌である。陶磁器、フィゴの羽口、瓦片、土器が出土している。

出土遺物 (第25図) ……36は陶器碗で外面にワラ灰軸か?が施されている。在地産か。37は瓦質の火鉢で外面はスタンプで亀甲文?等押し、内面は横方向のクシ目が施されている。

S C 30 (第20図) ……S C 26の下で検出された不整形円形プランの土壌で、陶磁器、瓦片、土器が出土している。

出土遺物 (第25図) ……38は肥前陶器の碗で外内面とも灰軸が施され、畳付きは露胎である。1610～40年代。39は肥前染付の猪口で外面に草文が描かれる。18世紀前半～中葉。

S C 31 (第21図) ……石垣内で検出された隅丸長方形プランの土壌でS H 440と切り合っている。覆土中からは陶磁器、瓦片、フィゴの羽口、鉄滓等が出土している。S H 440からは「() 水通 ()」の銭貨が出土している。

出土遺物 (第25図) ……40は染付の広東碗の蓋で外面はひょうたん文が描かれている。1780～1840年代。41は土師質の七厘で外内面ともナデ仕上げである。

S C 32 (第21図) ……調査区の西側に検出した不整形円形の落ち込みで鉄滓が出土した。

S C 11 (第22図) ……調査区の中央を横切る溝の北側、S E 4の西隣りで検出された楕円形プランの土壌である。他の土壌と比べ覆土の上面が非常に硬く、乾燥した状態であった。遺物は東播系の須恵器、土師質の皿や鉢、甕、布痕土器等が出土している。

出土遺物 (第27図) ……43と44は土師質の坏で外内面ともナデである。44はヘラ切り底。45～47は土師質の皿で、外内面ともナデ仕上げ。45・47はヘラ切り底。48は須恵質の皿で外内ともナデ仕上げでヘラ切り底を呈する。49は土師質の甕で外面胴部に叩き調整が施され、内面には縦方向のヘラ削りがみられる。胴部から口縁部が屈曲し外方に延びる口縁を持つが、口縁部に歪みがあるため図示しているものの傾きには不安が残る。50は土師質の甕で胴部から屈曲して外面にやや膨らみのある口縁が外方に延びる。外内面ともナデ仕上げである。51は土師質の土器であるが器種不明である。52は鉢?の胴部下位から底部付近であると思われるが、器種不明である。外面はナデ、内面は横方向のハケ目とナデ仕上げである。53は布痕土器の底部である。尖底で、内面に比較的織り目の細かな布の圧痕が残る。54は須恵器の片口鉢である。口唇部および口縁内面に自然粘が見られる。これらの遺物から土壌の年代は平安中期頃と推定される。

S C 24・25 (第20図) ……古墳時代の遺構検出面まで掘り下げた時に調査区中央の土層壁の断面で確認された土壌で、ほとんど半分以上が壊された状態であった。土師質の壺、皿、須恵器が出土している。

出土遺物 (第27図) ……55は土師質の短頸壺である。胴部外面に粗いハケ目が見られる。56～58は土師質の皿である。器面は風化が著しいが、ヘラ切り底と思われる。59は土師質の皿である。体部は緩やかに内湾する。底部は静止糸切りである。60は土錘である。61は土師質の皿で底部は静止糸切りである。62は土師質の皿で底部はヘラ切り底と思われる。63は須恵質の甕か。

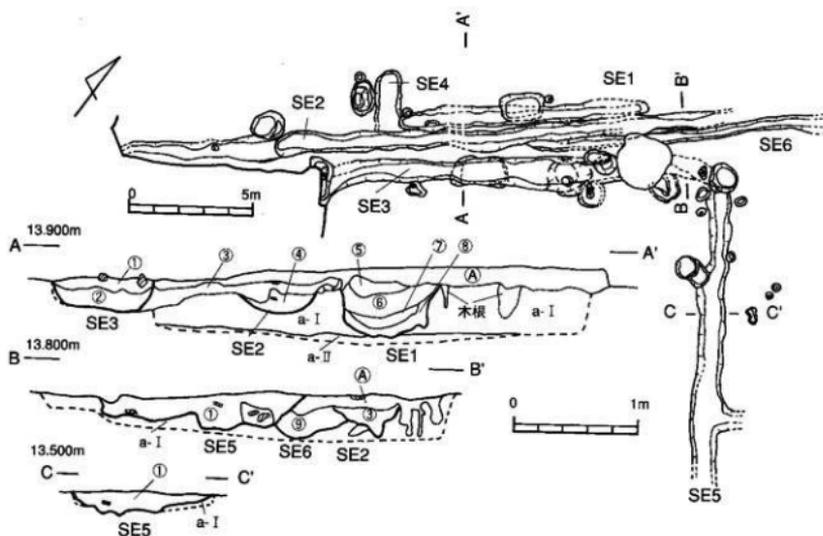
第3節 溝状遺構

1 概要

溝状遺構の検出は土壌と同じように表土層を除去した面でおこない6条検出された。調査区の中央部を数条もの溝が複雑に重なり合って東西方向に横切っている。また、造成がおこなわれていることと土壌や柱穴等の別の遺構が幾つも掘り込まれているため調査に困難を要した。切り合いはSE6→SE2→SE1→SE3・SE5の順である。SE3とSE5は出土遺物からみても同一遺構と推定されるが、木の根やSC13に切られているため断定できない。SE4は遺構が不明瞭であったため切り合いは不明である。

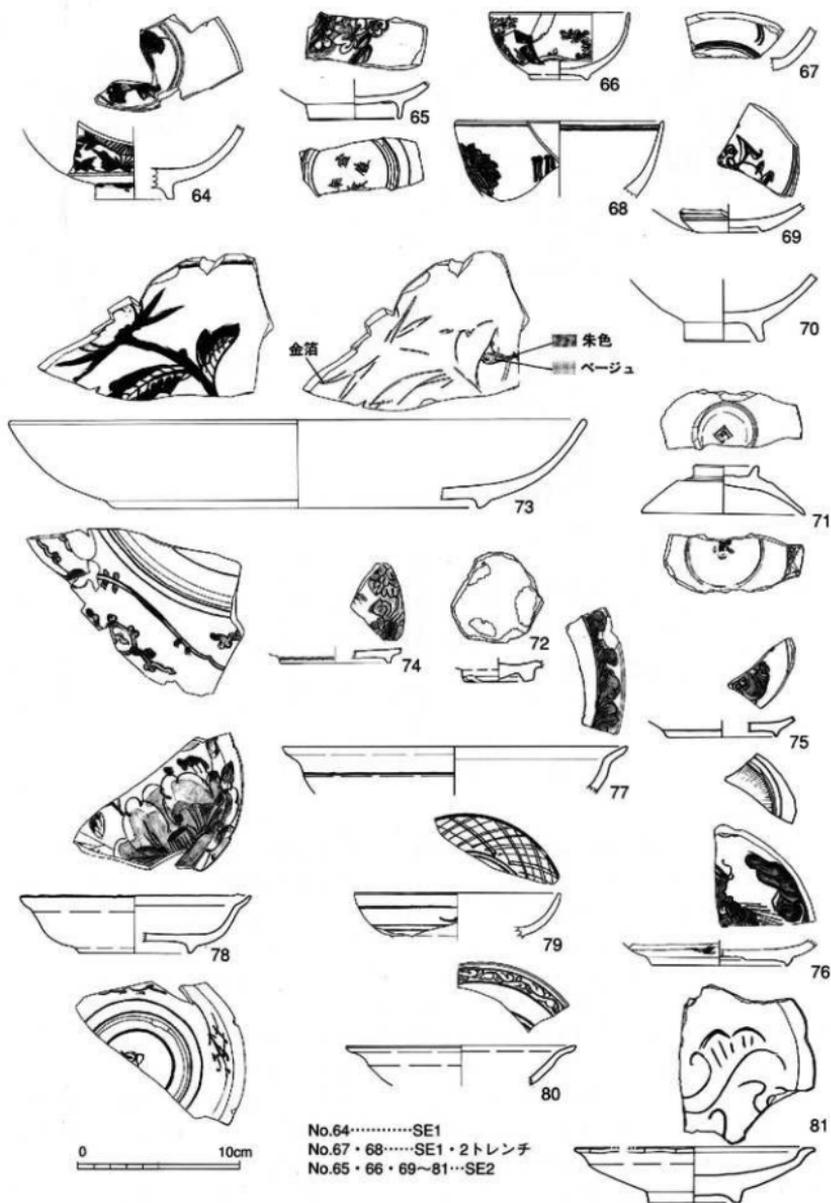
2 遺構と出土遺物

SE1……調査区の中央部を東西に走りU字型の断面を呈する溝状遺構である。幅約0.8m、深さ約0.45mで途中SC23に切られている。覆土中からは陶磁器、鉄滓、土師質土器、須恵器、キセル等が

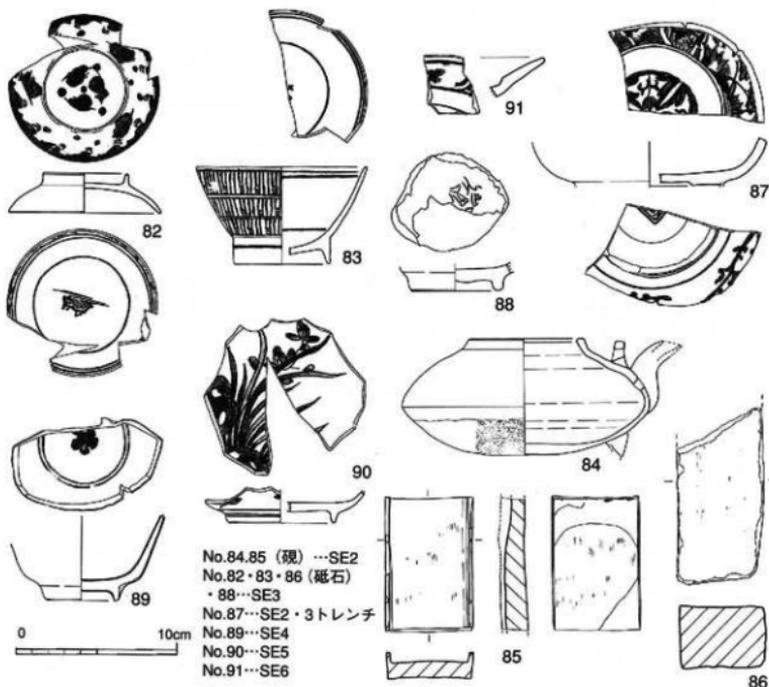


- (A) 暗褐色砂質土(造成土)～炭粒、白・橙色粒含 硬質 ①暗褐色砂質土+a-I層～炭粒、鉄滓含 やや軟質②暗褐色砂質土+灰色ブロック～鉄滓、鉄分粒、炭粒多く含 軟質 ③A+灰褐色砂質土～かたくしまっている
 ④暗褐色砂質土～炭粒、橙・白色粒含 しまっている ⑤明褐色+灰褐色砂質土～白色粒、炭粒含 硬質 ⑥灰褐色砂質土～炭粒、橙・白色粒、鉄分粒含 しめり大 やや軟質 ⑦灰褐色砂質土+a-Iブロック～硬質 ⑧灰褐色砂質土～軟質 ⑨灰褐色砂質土～炭粒、橙・白色粒、鉄分粒含 軟質

第28図 SE1・2・3・5・6土層断面実測図(1/40)



第29図 SE出土物実測図(1/3)



第30図 SE出土遺物実測図(1/3)

出土している。

出土遺物(第29図)……64は中国福建省漳州窯産の呉須手染付碗である。16世紀末~17世紀前半。67と68はSE1とSE2のトレンチから出土している。67は中国産の青磁碗で内面に画花文が描かれている。12~13世紀。68は瀬戸美濃系の染付碗で外面に菊文が描かれている。19世紀後半。

SE2……SE1の南側に平行に流れる溝で、SE1に切られている。幅約0.6m、深さ約0.25mで西側は調査区の端まで検出されさらにその先に延びる可能性もあるが、東側は途中で不明瞭になっている。出土遺物は陶磁器、碗、銭貨、キセル、土師質土器、瓦片、フイゴの羽口、須恵器等がある。

出土遺物(第29図)……65は肥前染付の皿で内面に流水と梅文、高台内に「宣徳年(製)」とある。1660~80年代。66は肥前色絵碗で外面は桜と流水文?が描かれる。18世紀後半頃。69は中国景德鎮窯の染付皿で、内面に人型寿字文が描かれ碁笥底を呈する。16世紀前半~中葉。70は肥前陶器の呉須手碗で外内に透明釉が施される。17世紀後半~18世紀初頭。71は肥前青磁染付で高台内に渦福マークがある。発色不良の製品で18世紀後半。72は佐賀県嬉野内野山窯の陶器皿で1610~30年代。73は肥前染付の大皿で1と同一個体と思われる。内面に下絵の透明線と朱色と金箔が付いている。18世紀後半。74は肥前染付皿で高台内に放射状の筋が施されている。75は中国景德鎮窯の染付皿で内面に龍文が描かれ高台内

に放射状の筋がある。二次的な火熱をうけている。16世紀末～17世紀初頭。76は肥前染付の皿で内面は雲龍文が描かれ蛇ノ目大型高台を呈する。18世紀後半。77は肥前染付皿で内面に波文を描く。1630～50年代。78は肥前染付の皿で外面に唐草文、内面に牡丹文、高台内に渦福を描く。輪花口縁を呈し18世紀中葉～末。79は肥前染付の皿で外面に唐草文、内面に斜め格子文を描く。口唇部は口紅で18世紀後半。80は肥前染付の皿で内面に斜め格子文？を描く。1620～40年代。81は肥前青磁皿で内面にヘラ描き文を描き、輪花口縁を呈する。

(第30図) ……84は灰釉の施された土瓶である。85は山口県産の赤間硯で接着のための漆が附着している。

SE3 ……SE1・2と平行に流れ、建物の礎石やSC26に切られる。陶磁器の他に鉄滓やファイゴの羽口が多量に出土している。幅約0.8m、深さ約0.3m。

出土遺物(第30図) ……82は肥前染付の広東碗の蓋で外面に千鳥波文、内面に岩波文を描く。口唇部の内外に漆が附着している。1780～1840年代。83は肥前系の染付広東碗で外面に梵字文を描く。1780～19世紀前半。86は砥石である。87は肥前染付の皿で外面に唐草文、内面に草花文？を描く。蛇ノ目大型高台を呈し18世紀後半のもので、佐賀県山内の筒江窯産である。88は中国産の青磁で内面に印花文、高台内は蛇ノ目軸剥ぎで14世紀後半～16世紀中葉。

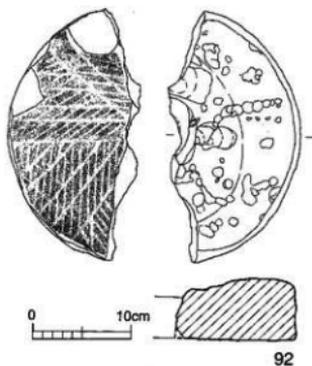
SE4 出土遺物(第30図) ……89は肥前青磁染付碗で見込みに五弁花文を描く。18世紀後半。その他に鉄製品も出土している。

SE5 ……調査区の東側を南北に走っている。出土遺物からSE3に続くことも推定される。幅約1.1m、深さ約0.2mである。

出土遺物(第30図) ……90は肥前系の染付皿で19世紀初頭～幕末。

SE6 ……SE2の下に検出され掘り込みは明瞭でない。調査区の中央辺りから東端まで延びる。陶磁器、キセル、ファイゴの羽口、鉄滓、土器・須恵器等が出土している。

出土遺物(第30図) ……91は染付の皿で16世紀末～17世紀前半。92(第31図)は高岡石(砂岩)の石臼である。



第31図 SE6 出土石臼実測図

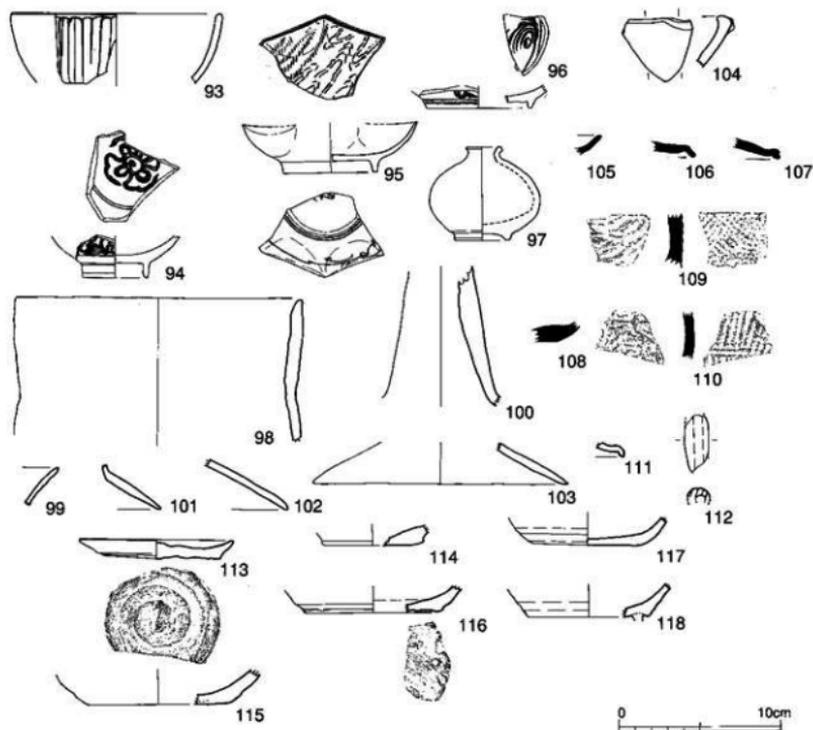
第4節 柱穴群

1 概要

柱穴群は石垣内と北側半分に展開している。石垣内の礎石建物跡以外に建物が組めるような柱穴はみあたらない。それぞれの時期は確定できないが礎石建物跡と同じもしくは古い段階と考えられる。

2 出土遺物(第32図)

ここではおよそ400余りの柱穴群からのおもな出土遺物を図示した。遺物によっては流れ込みのものもあり、必ずしも遺物と遺構の時期が一致するとは限らない。17世紀後半～18世紀前半の肥前染付(94・95)や14～15世紀の中国青磁碗(93)、16世紀頃の中国染付(96)、18～19世紀の北部九州辺りが産地の

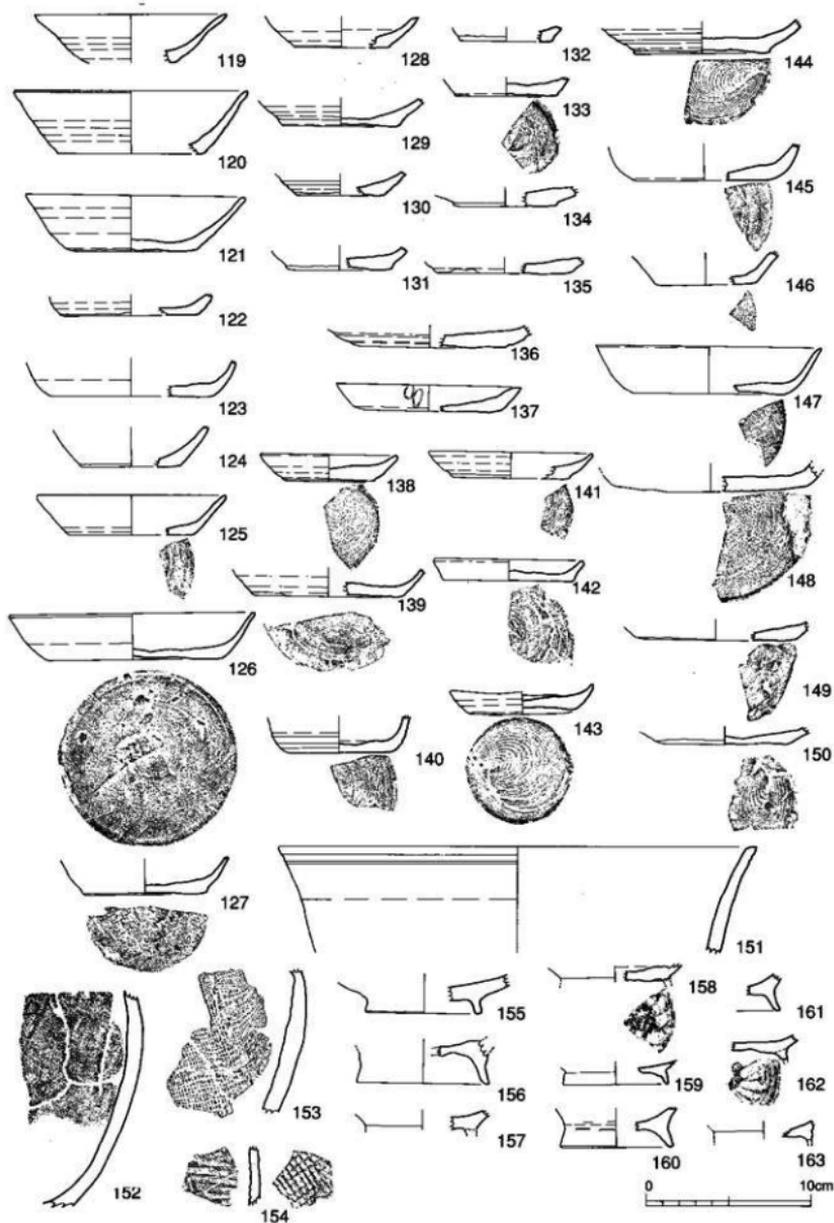


第32図 SH出土遺物実測図 (1/3)

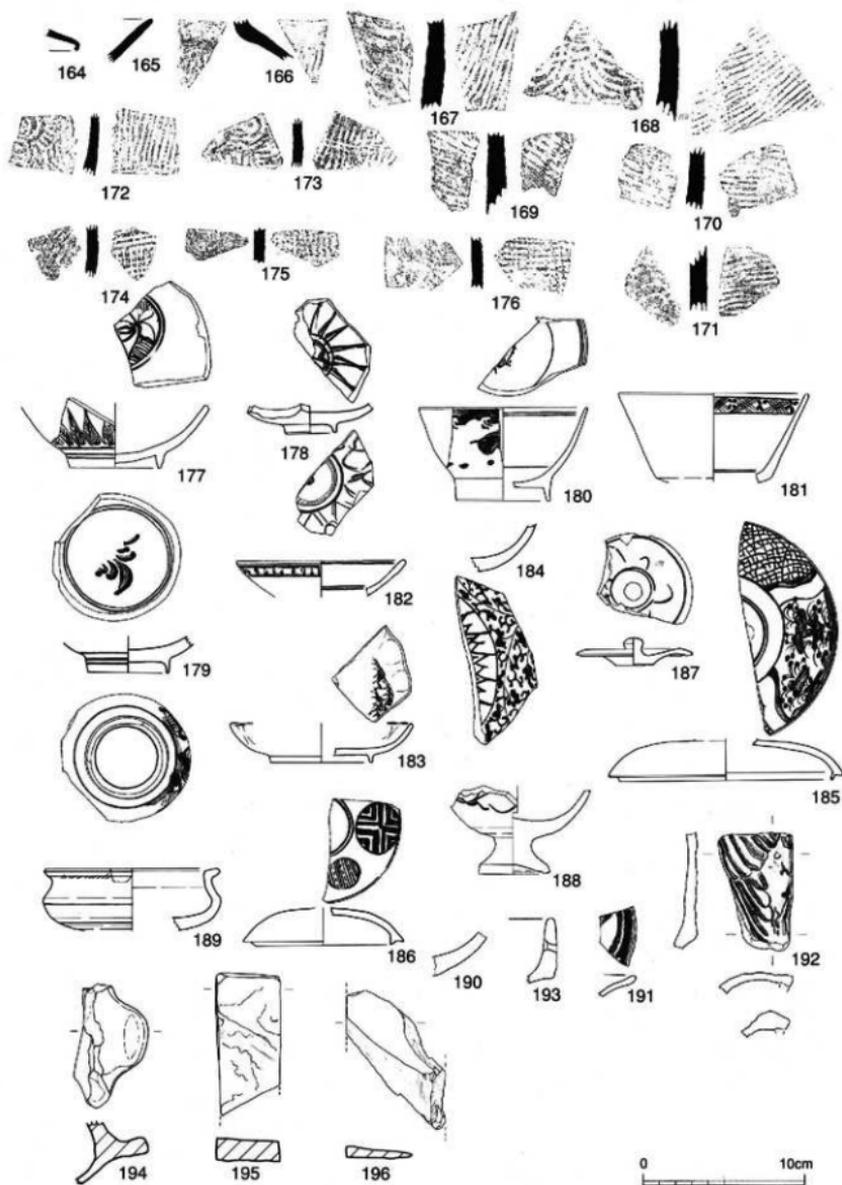
小瓶等が出土している。また、古墳時代の土器片、古代・中世の土師、須恵器もある。111は土師質の壺で112は土錘である。

第5節 包含層の遺物 (第33・34図)

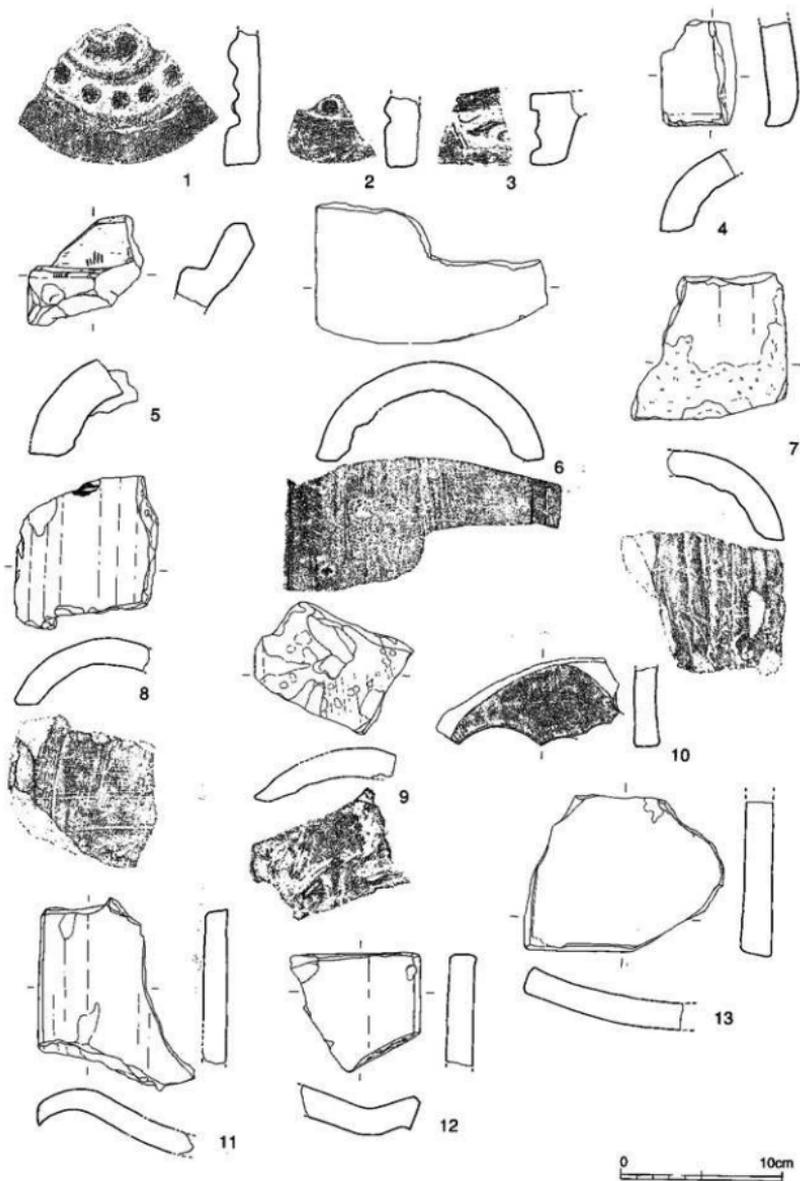
ここでの包含層の遺物は表土を除去してから古墳時代の遺構を検出するまでのa-I層と造成土、また、それらに掘り込まれた遺構に流れ込んだ遺物にあたる。紙幅の関係から詳細な説明ができないので簡単に述べたい。119~121は土師質の坏で121はヘラ切り底を呈する。122~150は土師質の皿で132・138・141・143~147・150は糸切り底である。全体的に器面の風化が著しいがナデ仕上げがみられる。151は土師質の鉢で152と153は布痕土器の胴部である。152の内面は布痕面の上に粘土の貼り付けがみられる。154は格子目叩きのある土師質土器である。155・159は土師質の高台付皿で156~158・160~163は高台付碗である。158と162は高台内に放射状の指頭痕がみられる。164~176は平安時代~古代頃の須恵器である。177は中国景德鎮窯の染付碗で16世紀前半~中葉。外面に芭蕉葉文、内面に蓮の花が描かれている。178~180・184~186・188・191は肥前染付である。詳しくは観察表を参考にしていただきた



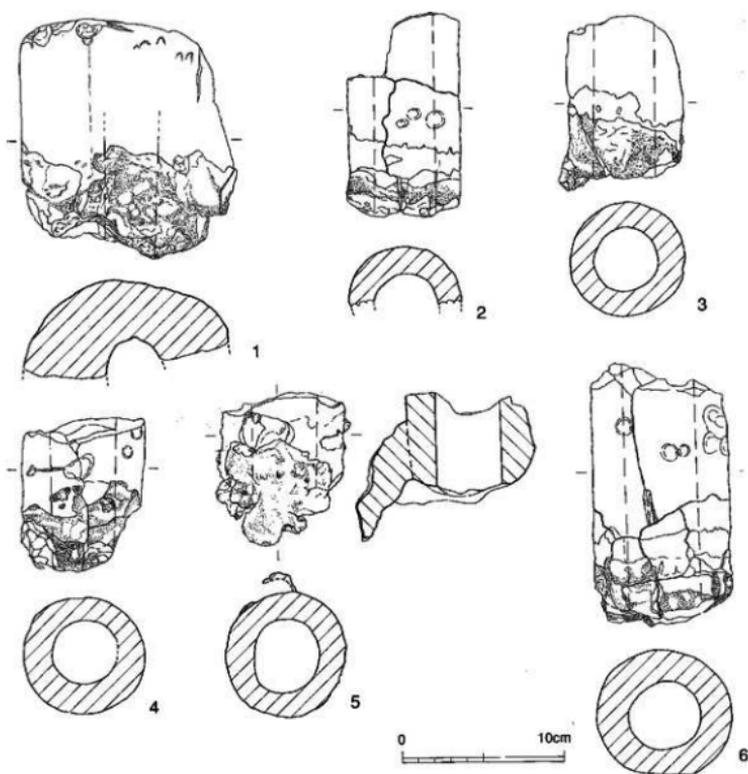
第33图 包含層出土遺物実測図 (1/3)



第34图 包含层出土遗物实测图 (1/3)



第35圖 瓦実測圖 (1/3)



第36図 フィゴの羽口実測図 (1/3)

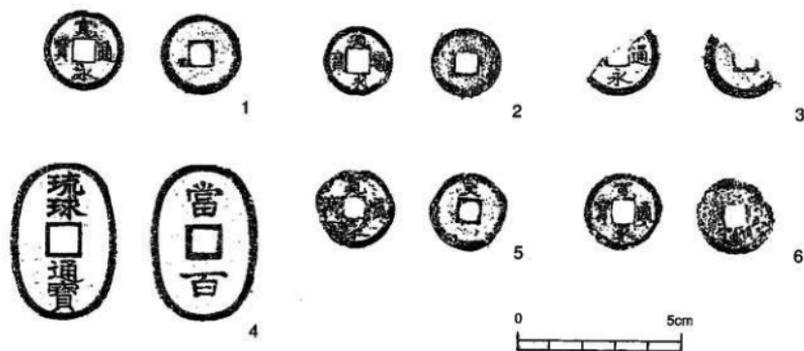
い。181は肥前青磁染付碗で17世紀中葉～1780年代。内面に四方禰文を描く。182は中国福建省系の染付皿で16世紀後半。183は肥前系の染付皿で輪花口縁を呈する。内面に雪持笹を描く。18世紀末～幕末。187は関西系陶器蓋で19世紀頃。190は中国産の白磁碗で13～14世紀。192は肥前有田産の色絵付掛花生けで鳥の形のものと思われる。18世紀前半～中葉。193は土師質の焙烙で口縁部に穿孔がある。194は土師質鋼の把手部かと思われる。195と196は砥石である。

第6節 その他の遺物

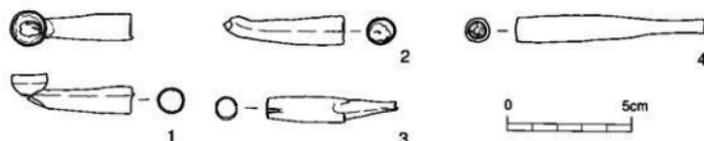
1 瓦 (第35図)

瓦類もかなり多く出土している。SC9・10やSC13・14のように瓦廃棄のために掘られた土壌も存在する。

1・2は三巴文軒丸瓦である。1は巴が大きく表現され右に巻いている。3は軒平瓦である。4と



第37図 銭貨拓影 (2/3)



第38図 キセル実測図 (1/2)

と5は玉縁付丸瓦である。4の内面は布目痕の上をナダ消している。筒部の側面を面取している。5は内面に布目痕と絞り痕?がみられ筒部の側面と玉縁部は面取されている。6~9は丸瓦で何れにも内面に布目痕がみられる。6は瓦の側面の外内面が面取されている。10は端部が波状型をなす瓦であるが種類が不明である。11は棧瓦で内面に布目痕がみられる。12と13は平瓦で12は端部内面が面取されている。

2 フィゴの羽口 (第36図)

鉄滓とともにかなり多くのフィゴの羽口が出土している。特にSE3・SC26からは多量に出土している。羽口の端部内外面には自然釉がガラス質になって固まったものや鉄が付着している。1は砂岩製で2~6は土製である。

3 銭貨・キセル

(第37図) …… 1~3・5・6は寛永通宝で5は背に「文」がみられる。4は地方通貨の琉球通宝である。薩摩藩が領内通用貨幣として鑄造したものと思われる。

(第38図) ……キセルは雁首、吸い口あわせて4点が出土した。

銭貨出土遺構一覧表

図面番号	古銭No.	出土地点
37	1	SE 5
◇	2	SE 2
◇	3	SH440
◇	4	C 3 G
◇	5	石垣東側
◇	6	排土中

キセル出土遺構一覧表

図面番号	遺物番号	出土地点
38	1	SE 2
◇	2	SE 5
◇	3	SE 6
◇	4	SE 1

観 察 表

図録 番号	遺物 番号	出土 地点	種類	特徴	法差 (cm)			形態および文様の特徴	色 調		備 考
					口径	底径	器高		外	内	
24	1	SCI	磁器	大皿	—	—	—	染付、金箔、朱色付着(下絵か?) 外・唐草文 内・ボタニク?	白	白	肥前 180後半 内・同一個体か
*	2	SCI	磁器	皿	—	—	—	青磁染付、貫入 外・唐草文	白	白 明緑灰	肥前 180後半
*	3	SC4	磁器	碗 (脚型)	—	(4.0)	—	染付、貫入 外・木文文に菊花散らし 内・五弁花文	白	白	肥前 1790~1810年代
*	4	SC5	磁器	皿	—	(6.4)	—	染付	白	白	肥前 染色不足 180後半~180初頭
*	5	SC5	磁器	皿	—	(12.0)	—	染付 内・唐草文	灰白	灰白	肥前 遠見系 180後半
*	6	SC7	陶器	碗 (8.8)	3.0	4.9	—	外内・透明釉 貫入、高台と高台内・露胎	灰白	灰白	関西系 180後半~180初頭
*	7	SC9	磁器	縁口	—	(5.5)	—	染付 外・草花文	白	白	肥前 180中葉~末
*	8	SC9	磁器	皿 (12.4)	—	—	—	染付 外・草花文? 内・唐文	白	白	肥前系 180初頭~幕末
*	9	SC9	陶器	蓋 (急須)	4.7	—	1.7	無釉 つまみ内に白土	灰白	灰白	関西系 180
*	10	SC9	陶器	蓋 (行字蓋)	18.2	つまみ径 6.0	5.4	外・一筋筋筋、白土をたらす トビカンナ目 内・透切肌	に灰白帯	に灰白帯	関西系 180頃 外灰・スス付着
*	11	SC10	陶器	土瓶蓋	4.8	受部径 5.8	—	外・無釉 内・無釉	黒釉	暗青	在地面か
*	12	SC10	陶器	土瓶	6.4	4.1	9.1	外・無釉 内・無釉のたれ 注ぎ孔3個、三足付き	暗赤釉 黒釉	黒釉 暗赤	セットをなす 外・スス付着
*	13	SC10	磁器	紅皿	7.8	2.4	2.8	染付 外・「大阪新町お徳紅」	灰白	灰白	肥前 180中葉~末
*	14	SC10	磁器	碗	—	5.3	—	染付 内・見込みに「善」字	灰白	灰白	肥前 180前半 広原系
*	15	SC10	陶器	碗	9.4	4.2	5.7	外・無釉 高台内・透明釉 見込み・目無筋蓋	明黄釉	灰白	肥前 1800~1860年代
*	16	SC10	磁器	蓋 (9.6)	(3.9)	2.9	—	青磁染付 内・五弁花文(コンニャク印柄) 土留方唐文	灰白	灰白	口縁・染付着 灯明赤~灰白か
*	17	SC10	磁器	碗	(9.2)	(3.8)	5.4	染付 外・唐草文 内・竹文	白	白	肥前 1820~1880年代 遠取り肌
*	18	SC10	陶器	焙烙	29.0	—	5.0	外・ナゲ 内・ナゲ	暗赤釉 赤黒	浅黄釉	底部・外壁づくり 外内・スス付着
*	19	SC10	磁器	皿	—	—	—	青磁 外・貫入 高台・砂目付着 染付・露胎 内・ヘラ割キ文	明緑灰	明緑灰	肥前 1830~1840年代
*	20	SC13	磁器	碗	—	—	—	青磁染付 内・五弁花文	黄オリーブ系	灰白	肥前 180後半
*	21	SC12	磁器	碗	—	4.0	—	青磁染付 見込み・五弁花文、砂目付着 染付・砂目付着	白 灰白	白	肥前 180後半
*	22	SC14	磁器	小杯 (5.4)	(2.1)	2.5	—	染付 外・唐文	白	白	肥前系 180後半~180初頭
*	23	SC17 SC19	磁器	皿 (13.6)	(7.4)	2.4	—	染付 外・唐草文 高台内・「大黒半蔵」 染付・砂目付着 内・五弁花文、五弁花文(コンニャク印柄) 外・露胎・透明釉	灰白	灰白	肥前 180前半か後半か
*	24	SC17	陶器	鉢	—	—	—	内・白化粧を塗った後、透明釉を 施胎、露胎	灰白	灰白	肥前 180頃 三島手
25	25	SC18	磁器	皿 13.9	6.8	3.4	—	染付 内・五弁花文(コンニャク印柄)、唐草文 染付・砂目 見込み・砂目無筋蓋	灰白	灰白	肥前 遠見系 180後半
*	26	SC18	陶器	灯明皿	8.5	3.0	—	内・無釉 底部・糸切り	暗赤釉	暗赤釉	在地面か 180~180C
*	27	SC19	陶器	土瓶	9.7	6.8	9.5	外・カナン目 底部・ヘラ切り 三足付き白化粧土、ワケ取輪か 内・ナゲ、一筋筋のたれ注ぎ孔3個	黄オリーブ系	に灰白帯	外・スス付着
*	28	SC19	磁器	碗	—	—	—	青磁	黄オリーブ系	黄オリーブ系	中国産 湯沢り筋 180後半~180中葉
*	29	SC19	磁器	皿	—	(7.9)	—	染付、貫入	灰白	灰白	肥前 180頃
*	30	SC26	磁器	碗	—	(8.9)	—	染付 外・唐草文か	白	白	肥前 鎌谷系 1790~1820年代
*	31	SC27	磁器	碗	—	—	—	染付 外・唐文	灰白	灰白	肥前系 180後半
*	32	SC27	陶器	蓋	—	(4.6)	—	透明釉 見込み・砂目付着 内・露切肌 染付・砂目付着	灰白	灰白	肥前 湯野内野山鍋 1810~1820年代
*	33	SC28	磁器	皿	—	(5.0)	—	染付 内・唐文	白	白	肥前 1830~1840年代

原簿 番号	通巻 番号	出土 地点	種類	器様	法量 (cm)			形態および文様の特徴	色 調		備 考
					口径	直径	器高		外	内	
25	34	SC78	磁器	碗	—	(8.0)	—	染付 内・五弁花文(コンシヤク印判) 裏面白・「大(明)年製」	白	白	肥前 18C前半
*	35	SC78	磁器	碗	—	(4.8)	—	染付 外・水文か 内・四葉文	白	白	中根屋 万葉心形 16C後半
*	36	SC29	陶器	碗	(10.5)	6.1	8.1	外・ワラ灰釉か	にぶい焼	にぶい焼	在来土か
*	37	SC29	瓦葺	火鉢	—	—	—	外・スタンプによる文様 内・タシ目	黄灰	黄灰	在来土か
*	38	SC30	陶器	碗	—	3.9	—	外内・灰釉 裏付・黄胎	灰オリーブ	灰オリーブ	肥前 1610-40年代
*	39	SC30	磁器	縁口	—	(3.8)	—	染付 外・草文	灰白	灰白	肥前 18C前半-中葉
*	40	SC21	磁器	蓋	(9.6)	(5.4)	—	染付 外・ひょうたん文	白	白	広重調の蓋 1780-1840年代
*	41	SC21	土器質	七厘	—	(10.9)	—	外・ナデ 内・ヨコナデ、粘土のつなぎ目	にぶい焼	浅黄緑 緑灰	内・黒家
27	43	SC11	土師	坪	(12.0)	(8.4)	—	ナデ	緑	緑 浅黄緑	
*	44	SC11	土師	坪	—	(9.7)	—	ナデ	浅黄緑	淡緑	ヘラ切り底
*	45	SC11	土師	皿	—	(9.3)	—	ナデ	黄緑	浅黄緑	ヘラ切り底
*	46	SC11	土師	皿	(14.1)	—	3.3	ナデ	浅黄緑 灰白	浅黄緑 灰白	
*	47	SC11	土師	皿	—	(9.9)	—	ナデ	灰白	浅黄緑	ヘラ切り底
*	48	SC11	泥志	皿	(13.8)	(7.6)	2.5	ナデ	灰白	灰白	ヘラ切り底
*	49	SC11	土師	蓋	(17.6)	—	—	外 口径・ナデ、胴部・平行タテキ 内 タテの指り砂粒の動き	浅黄緑	浅黄緑	0.1-5mmの砂粒を含む
*	50	SC11	土師	蓋	(14.7)	—	—	外・ナデ 内・ナデ 砂粒の動き	浅黄緑	浅黄緑	0.1-4mmの砂粒を含む
*	51	SC11	土師	不明	—	—	—	外・指押さえ 内・ナデ	浅黄緑	灰白	1-3mmの砂粒を含む
*	52	SC11	土師	鉢 (胴部)	—	—	—	外・ナデ 内・横方向のナデノケ目、ナデ	緑 にぶい焼	緑 にぶい焼	1mmの粒を含む
*	53	SC11	赤土 土師	鉢 (胴部)	—	—	—	外・ナデ 内・赤豆痕	にぶい焼	緑	0.1-1mmの粒を含む
*	54	SC11	泥志	鉢 (口縁)	—	—	—	外内・自然釉ナデ	灰	黄灰	東埼玉 18C頃
*	55	SC24	土師	蓋	(17.3)	—	—	外・ナデ、緑、胴のハケ目 内・ナデ、風化石灰	緑 にぶい焼	緑 にぶい焼	0.1-2mmの砂粒を含む
*	56	SC24	土師	皿	—	(6.2)	—	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	ヘラ切り底
*	57	SC24	土師	皿	—	(6.4)	—	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	ヘラ切り底
*	58	SC24	土師	皿	—	(6.6)	—	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	ヘラ切り底
*	59	SC24	土師	皿	(14.2)	(9.0)	—	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	糸切り底
*	61	SC25	土師	皿	(8.9)	(7.5)	1.6	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	糸切り底
*	62	SC25	土師	皿	—	(7.2)	—	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	ヘラ切り底
*	63	SC25	泥志	蓋	(13.8)	—	—	外・ヘラ削り、ナデ 内・ナデ	灰 黄灰	灰白	
29	64	SE1	磁器	碗	—	(4.9)	—	染付 裏面・砂目付唐	白	灰白	中田屋徳次 津州屋 16C末-17C前半 呉服手
*	65	SE2	磁器	皿	—	(5.5)	—	染付 内・波文に花(梅)文 裏面白・「宣樂堂製」	白	白	肥前 1660-80年代
*	66	SE2	磁器	碗	(8.6)	(3.4)	4.2	色絵 内・紅文に泥水文	白	白	肥前 18C後半頃
*	67	SE-式	磁器	碗	—	—	—	青磁 内・梅花文	灰白	灰白	中根屋18C-18C
*	68	SE-打	磁器	碗	(12.8)	—	—	染付 外・菊文、貫入	白	白	瀬戸黄磁系 19C後半

図面番号	遺物番号	出土地点	標式	器種	径長 (mm)			形状および文様の特徴	色 質		備 考
					口径	底径	器高		外	内	
29	69	SE2	磁器	皿	—	(3.5)	—	染付 内・人形寿字文	明緑灰	明緑灰	中国産磁器 16C前半～半葉 著差窯
*	70	SE2	陶器	碗	—	—	—	外内・透明釉、貫入 染付・露胎	淡黄	淡黄	肥前 17C後半～19C初葉 長手窯
*	71	SE2	磁器	蓋 (9.8)	(3.7)	3.0	—	外・青磁 内・染付 高台内・露胎	灰白	灰白	肥前 18C後半 景色不直
*	72	SE2	陶器	皿	—	4.2	—	施釉、貫入 内・砂目付書 染付・砂目付書	灰白	灰白	薩野内野山窯 1610～30年代
*	73	SE2	磁器	大皿 (34.6)	(22.0)	(5.4)	—	染付 外・唐草文 内・ボナン文、藍色、金箔付書(7箇所?)	白	白	肥前 16C後半 1と同一個体か
*	74	SE2	磁器	皿	—	(6.9)	—	染付 高台内・放射状の筋	白	白	肥前
*	75	SE2	磁器	皿	—	(6.5)	—	染付 内・露文 高台内・露胎 高台内・放射状の筋	白	白	中尾常徳窯 火熱をうけている 16C末～17C初葉
*	76	SE2	磁器	皿	—	(8.4)	—	染付 内・唐草文 底・紫ノ目大型高台	白	白	肥前 18C後半
*	77	SE2	磁器	皿 (20.8)	—	—	—	染付、貫入 内・露文	灰白	灰白	肥前 1630～50年代
*	78	SE2	磁器	皿 (14.0)	(6.8)	3.6	—	染付 外・唐草文 高台内・露胎 内・ボナン文、口縁・露胎	白	白	肥前 18C中葉～末
*	79	SE2	磁器	皿 (12.7)	—	—	—	染付 外・唐草文 内・斜め格子文、口縁・口紅	白	白	肥前 18C後半頃
*	80	SE2	磁器	皿 (13.9)	—	—	—	染付 内・斜め格子文	白	白	肥前 1620～40年代
*	81	SE2	磁器	皿 (14.5)	(5.4)	3.4	—	青磁、貫入、染付、露胎、砂目付書 内・ハダ書き文 口縁・露胎	明緑灰	明緑灰	肥前 1630～1640年代
30	82	SE2 SC29	磁器	蓋	9.2	5.2	2.5	—	白	白	肥前 広電園の産 1730～1840年代 口縁部、露付書
*	83	SE2 SC29	磁器	碗 (10.5)	(5.9)	6.1	—	染付、貫入 外・波ノ魚文 内・露胎文	白	白	肥前系 広電園 1730～18C後半
*	84	SE2	陶器	土瓶 (7.1)	4.2	(7.4)	—	外・かき目、灰釉 内・ナア 注ぎ孔3個	にぶい青	明緑灰	外・ス付書
*	85	SE2	—	碗	最大幅 9.4	残存長 8.3	最大深 1.7	—	—	—	漆で塗布、山口県産赤銅 重量:23.8g
*	87	SE2-37	磁器	皿	—	(9.0)	—	染付 外・唐草文 内・草花文 紫ノ目大型高台	明緑灰	明緑灰	肥前 新江原(佐賀県山内) 18C後半
*	88	SE2	磁器	碗	—	5.5	—	青磁、貫入 内・和文 高台内・紫ノ目大型高台	オリーブ灰	オリーブ灰	中国産 14C後半～16C中葉
*	89	SE4 CBG	磁器	碗	—	4.5	—	青磁染付 外・青磁 内・透明釉 見込みにご花文	明緑灰	明緑灰	肥前 18C後半
*	90	SE2	磁器	皿	—	6.7	—	染付	白	白	伊豆系 15C初葉～幕末
*	91	SE2	磁器	皿	—	—	—	染付、貫入多し 白化粧の景色付かけか	灰白	灰白	16C末～17C前半
32	93	SE245 SE246	磁器	碗 (12.8)	—	—	—	青磁、貫入多し 外・菊文露胎文	灰白	灰白	中国産 14C～15C
*	94	SH196	磁器	碗	—	(3.5)	—	染付 外・唐草文 内・露胎文	白	白	肥前1650～1740年代まで
*	95	SH192	磁器	皿 (10.5)	(5.7)	3.1	—	染付 口縁・口紅 底・赤土の底張り付け高台 外・唐草文 高台内・露胎	白	白	肥前 型紙刷り 1590～18C前半
*	96	SH192	磁器	皿	—	(7.2)	—	染付 内・水草魚文	白	白	中国産磁器 16C
*	97	SH195	陶器	小壺	2.0	3.3	5.7	外・鉄釉の上に灰釉 底部・露胎	灰赤	—	18～19C 福岡・大分辺が産地か
*	98	SH143	古墳	高環 (銅部)	(17.2)	—	—	外、口縁・ヨコナア 内、ヨコナア、斜のナア 裏面・斜のナア	浅黄橙	浅黄橙	外・漆色 1～2mmの砂粒を含む
*	99	SH144	古墳	高環 (銅部)	—	—	—	外内・ヨコナア	橙	橙	0.1mmの粒を含む
*	100	SH186	古墳	高環 (銅部)	—	—	—	外・風化灰釉 内・タナナア、風化灰釉	黄橙 浅黄橙	灰白	0.1～2mmの粒を含む
*	101	SH146	古墳	高環 (銅部)	—	—	—	ナア	浅黄橙	橙	1～2mmの粒を含む
*	102	SH147	古墳	高環 (銅部)	—	—	—	ナア	黄橙	黄橙	0.1～2mmの粒を含む
*	103	SH144	古墳	高環 (銅部)	—	—	—	ナア	黄橙 浅黄橙	浅黄橙	0.1～2mmの粒を含む

原簿 番号	通物 番号	出土 地点	種別	器種	法量 (cm)			形態および文様の特徴	色 質		備 考
					口径	底径	器高		外	内	
32	104	SH107	銅製	鉢	—	—	—	外内・ナデ 外・自然釉	灰	灰	東横系
*	106	SH193	銅製	甕	—	—	—	ナデ	灰	灰	
*	106	SH207	銅製	蓋	—	—	—	ナデ	灰	灰白	
*	107	SH153	銅製	蓋	—	—	—	ナデ	灰	灰	
*	108	SH205	銅製	皿	—	—	—	ナデ 底・ヘラ切りの後ナデ	灰白	灰白	
*	109	SH206	銅製	蓋 (胴部)	—	—	—	外・格子目タタキ 内・同心円	灰黄褐色	灰黄	
*	110	SH200	銅製	蓋 (胴部)	—	—	—	外・平行タタキ 内・平行あて具	浅黄	灰	106,172,173と同一個体か
*	111	SH113	土製	蓋	—	—	—	ナデ	灰白 浅黄褐色	灰白	
*	113	SH207	土製	蓋 (9.2)	(7.1)	1.2	ナデ	ナデ	明焼灰	明焼灰	外内・黄灰 ヘラ切り底
*	114	SH147	土製	皿	—	(6.2)	—	ナデ	浅黄	黄	
*	115	SH156	土製	皿	—	(8.6)	—	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	
*	116	SH164	土製	蓋	—	(8.6)	—	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	糸切り底
*	117	SH201	土製	皿	—	(7.2)	—	ナデ	橙	黄	ヘラ切り底
*	118	SH208	土製	高台付皿	—	—	—	ナデ	にぶい橙 浅黄	浅黄	
33	119	SC19	土製	坏	(11.5)	—	—	ナデ	黄 浅黄褐色	黄 浅黄褐色	
*	120	SC28	土製	坏	(14.0)	(9.0)	(3.9)	ナデ	黄 浅黄褐色	黄	
*	121	SB4	土製	坏	(13.2)	(7.7)	3.4	ナデ	黄 にぶい橙	黄	ヘラ切り底
*	122	CMG	土製	蓋	—	(8.4)	—	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ヘラ切り底
*	123	a-1	土製	蓋	—	(9.8)	—	ナデ	浅黄褐色 にぶい橙	浅黄褐色	ヘラ切り底 1-2mmの砂粒を含む
*	124	SB2	土製	皿	—	(6.0)	—	ナデ	黄 浅黄褐色	黄	
*	125	a-1	土製	皿	(11.4)	(7.3)	2.4	ナデ	にぶい橙	黄	ヘラ切り底
*	126	a-2	土製	皿	14.9	10.6	2.8	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ヘラ切り底
*	127	BSQ	土製	皿	—	(7.6)	—	ナデ	浅黄	浅黄	内・黄灰 ヘラ切り底 1-2mmの砂粒を含む
*	128	CMG a-1	土製	皿	—	(6.8)	—	ナデ	黄	黄	
*	129	BSQ	土製	皿	—	(7.2)	—	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ヘラ切り底
*	130	SC18	土製	皿	—	(5.3)	—	ナデ	黄	黄	ヘラ切り底
*	131	SC4	土製	蓋	—	(6.5)	—	ナデ	浅黄褐色	浅黄	1-2mmの砂粒を含む
*	132	SC19	土製	皿	—	(5.6)	—	ナデ	浅黄褐色	黄	糸切り底
*	133	SC18	土製	皿	—	(6.2)	—	ナデ	にぶい橙	黄	ヘラ切り底
*	134	SC3	土製	皿	—	(6.3)	—	ナデ	浅黄	浅黄	
*	135	SC19	土製	蓋	—	(8.1)	—	ナデ	黄褐色	浅黄褐色	ヘラ切り底
*	136	SH2	土製	皿	—	(9.3)	—	ナデ	浅黄	浅黄	ヘラ切り底
*	137	SB3	土製	皿	(11.1)	(8.9)	—	ナデ	浅黄褐色 灰白	黄褐色	ヘラ切り底

国 庫 番 号	建 物 番 号	州 土 地 区	種 別	種 類	法 量 (cm)			形 態 お よ び 支 柱 の 特 徴	色 質		備 考
					口 径	底 径	高 さ		外	内	
33	138	SC22	土脚	直	(8.2)	(5.6)	1.7	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	糸切り底
*	139	B5G	土脚	直	—	(9.2)	—	ナデ	橙	橙	ヘウ切り底
*	140	B5G	土脚	直	—	(6.1)	—	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	ヘウ切り底
*	141	B6GT	土脚	直	9.8	7.3	1.6	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	糸切り底
*	142	a-1層	土脚	直	9.0	8.0	1.3	ナデ	黄緑	橙	ヘウ切り底
*	143	B5G	土脚	直	8.6	6.6	1.4	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	糸切り底
*	144	SC22	土脚	直	—	(8.2)	—	ナデ	黄緑	黄緑	糸切り底
*	145	一筋	土脚	直	—	(7.8)	—	ナデ	橙 黄緑	橙	糸切り底
*	146	SC9	土脚	直	—	(6.2)	—	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	糸切り底
*	147	a-1層	土脚	直	18.7	(9.1)	(3.0)	ナデ	浅黄緑 灰白	浅黄緑 灰白	糸切り底
*	148	CSG	土脚	直	—	(11.8)	—	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	ヘウ切り底 1~3mmの砂粒を含む
*	149	B5G	土脚	直	—	(9.8)	—	ナデ	橙	にぶい橙	ヘウ切り底
*	150	a-1層	土脚	直	—	(7.6)	—	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	糸切り底
*	151	a-1層	土脚	斜	(29.0)	—	—	外・ヨコナデ、浅い枕 内・ナデ	浅黄緑	浅黄緑	0.1~3mmの砂粒を含む 外・高さ
*	152	a-1層	有蓋 土脚	斜	—	—	—	外・ナデ 内・有蓋、風化著しい	橙	橙	0.1~4mmの粒を含む
*	153	B5G直	有蓋 土脚	斜	—	—	—	外・斜のナデ 内・有蓋	橙	浅黄緑 橙	0.1~3mmの粒を含む
*	154	B4G	土脚	蓋	—	—	—	外・格子目タケ 内・平行あて具	にぶい橙	黄緑	
*	155	溝土	高台付直	—	(7.1)	—	—	ナデ	黄緑	黄緑	
*	156	a-1層	高台付直	—	(7.9)	—	—	ナデ	にぶい橙	橙	
*	157	B5G	土脚	高台付直	—	—	—	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	
*	158	CSG	土脚	高台付直	—	—	—	外内・ナデ 蓋・放射状の指痕痕	浅黄緑	浅黄緑	
*	159	SC9	土脚	高台付直	—	(6.4)	—	ナデ	黄緑	橙	
*	160	SC13	土脚	高台付直	—	(6.9)	—	外・ナデ、工具痕 内・ナデ	浅黄緑	浅黄緑	
*	161	SC22	土脚	高台付直	—	—	—	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	
*	162	B5G	土脚	高台付直	—	—	—	ナデ 蓋・放射状の指痕痕	橙	橙	
*	163	B5G	土脚	高台付直	—	—	—	ナデ	黄緑	黄緑	
34	164	B4G	直	蓋	—	—	—	ナデ	灰 灰白	灰	
*	165	B4G	直	坪	—	—	—	ナデ	灰白	灰	
*	166	A3G	直	蓋 (扇形)	—	—	—	外・平行タケ、自然離 内・平行あて具	灰黄	灰	172,173と同一個体か
*	167	溝土	直	蓋 (扇形)	—	—	—	外・平行タケ 内・同心円	灰	灰	
*	168	SC3	直	蓋 (扇形)	—	—	—	外・平行タケ 内・同心円	灰白 浅黄	浅黄	171と同一個体か
*	169	SC17	直	蓋 (扇形)	—	—	—	外・平行タケ 内・平行あて具	灰白 黄	浅黄	
*	170	CSG	直	蓋 (扇形)	—	—	—	外・平行タケ 内・平行あて具	にぶい橙	灰白	

田圃 番号	遺物 番号	出土 地点	種類	器種	法量 (cm)			形態および文様の特徴	色 調		備 考
					口径	底径	器高		外	内	
14	171	SC19	須恵	壺 (胴部)	—	—	—	外・平行タタキ 内・同心円	灰白 黄灰	黄灰	168と同一體か
*	172	CSG	須恵	壺 (胴部)	—	—	—	外・平行タタキ、自然釉 内・同心円	黄灰 黄灰	暗黄灰	110,166,173と同一體か
*	173	SC2	須恵	壺 (胴部)	—	—	—	外・平行タタキ、自然釉 内・同心円	黄灰 黄灰	灰	110,166,172と同一體か
*	174	SC7	須恵	壺 (胴部)	—	—	—	外・縦、横の平行タタキ、自然釉 内・平行あて具	暗灰	灰	
*	175	SC22	須恵	壺 (胴部)	—	—	—	外・格子目タタキ 内・ナデ	灰白	灰白	
*	176	CSG	須恵	壺 (胴部)	—	—	—	外・格子目タタキ 内・ナデ	灰白	黄灰	
*	177	表探	磁器	碗	—	(5.6)	—	染付 内・芭蕉堂文 内・蕉の文文	白	白	中国産 我知麻南 18C前半～中葉
*	178	SA1 SC	磁器	碗	—	(3.2)	—	染付、真入 外・二重網目文、高合内、渦福 内・菊文、一重網目文	灰白	灰白	肥前 18C前半～中葉
*	179	CSG	磁器	碗	—	4.9	—	染付 菊のみ、草文	白	白	肥前 17C末～18C初頭
*	180	CSG	磁器	碗	(10.3)	(5.8)	(5.8)	染付 外・鹿子鳥 内・段波	白	白	肥前 1780～1840年代 広東製
*	181	BSG	磁器	碗	(11.0)	—	—	青磁染付 外・菊文 内・扇文	明緑灰	白	肥前 17C中葉～1780年代
*	182	表探	磁器	皿	(10.4)	—	—	染付、真入多し	灰白	灰白	中国産磁器系 18C後半
*	183	OAG	磁器	皿	(11.0)	(6.2)	(2.4)	染付 内・寶持世 口縁・菊花	白	白	肥前系 色色不良 18C末～幕末
*	184	BSG	磁器	鉢	—	—	—	染付 外・扇草文	白	白	肥前 18C後半頃
*	185	CSG	磁器	盃	(12.8)	—	—	染付 外・メジ化文で区画、水鏡文 蕉文	明緑灰	白	肥前 18C中葉～1780年代まで
*	186	CSG	磁器	壺	(8.3)	—	—	染付 外・丸文 口縁・緑目付	白	白	肥前 18C中葉～末
*	187	OAG	青磁	壺	(7.1)	—	1.7	外・白化粧の後、洗、磨で文様 染釉 内・ナデ、菊輪	洗黄 オリーブ灰	洗黄	関西系 18C 内・赤切り
*	188	西入 IT	磁器	仏飯器	—	4.4	—	染付 薬師・羅地	白	白	肥前 1630～1660年
*	189	CSG	磁器	香炉	(10.4)	—	—	外・青磁 内・口縁部以外は黄釉	灰白	灰白	肥前 18C 外・くびれ部に工具痕有り
*	190	CSG	磁器	碗	—	—	—	白磁、真入	灰白	灰白	中国産 18C～14C
*	191	BAG a・19	磁器	小皿	—	—	—	染付 外・口縁部に白化粧のたまり	灰白	灰白	肥前 佐賀(塩田町) 志田焼 1820～50年代
*	192	BSG a層	磁器	梅花生け	—	—	—	外・色絵付、施釉 内・黄釉	白	白	肥前 有田焼 身の色が 18C前半～中葉
*	193	a・19	土器	燈台	—	—	—	外・ヨコナテ 内・ヨコナテ	明黄緑	明黄緑	穿孔あり 1mm以下の粒を含む
*	194	SH	土器	鍋?	—	—	—	ヨコナテ	洗黄緑	洗黄緑	0.1～1mmの粒を含む

土 錘 計 測 表

調査 番号	遺物 番号	出土 地点	器種	法量 (cm)			色 調	胎 土	焼成	備 考
				短長 (cm)	最大径 (cm)	重 (g)				
27	60	SC24	土錘	5.1	1.6	9.4	浅黄緑	2mmの粒を含む	良好	
32	112	SH34E	土錘	3.4	1.6	3.1	浅黄緑	0.1~0.5mmの粒を含む	良好	

石 器 計 測 表

調査 番号	遺物 番号	出土 地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
36	42	SC13	礫石製品	18.1	8.5	7.8	271.5		
30	96	SE3	砥石	10.5	5.3	3.8	397.4	頁岩	
31	92	SE9	石臼	25.8	13.5	6.4	343.5	砂岩	
34	195	SC33	砥石	8.8	3.9	1.2	81.8	頁岩	
*	196	CS9	砥石	8.5	4.1	1.0	36.0	頁岩	

ファイゴの羽口計測表

調査 番号	遺物 番号	出土 地点	器種	法量 (cm)			色 調		胎 土	焼成	備 考
				短長 (cm)	最大径 (cm)	重 (g)	外	内			
36	1	SC10	ファイゴの羽口	14.9	12.6	895.4					石材 砂岩 外・自然焼付着
*	2	SE6	*	12.6	7.0	267.4	先端・オリーブ 羽口・灰質, にぶ い黄	先端・オリーブ 羽口・浅黄緑	1mm以下の粒を含む	良好	外内・自然焼付着
*	3	SC26	*	10.9	7.2	352.6	先端・明確, 輪 口・にぶい黄 緑, 灰質	先端・黒灰, 羽 口・黄, 浅黄 緑	1mm以下の粒を含む	良好	外内・自然焼付着 鉄付着
*	4	SE3	*	9.7	7.5	347.7	先端・塊質, 輪 口・にぶい黄 緑, 灰質	先端・黒灰 羽口・にぶい 黄, 浅黄緑	2mm以下の粒を含む	良好	外内・自然焼付着 鉄付着
*	5	SE3	*	9.6	7.8	407.7	先端・にぶい黄 緑, 塊質, 羽 口・灰質, 明 黄緑, 灰質	先端・オリーブ, 灰質, オリーブ 羽口・灰質, 黄 緑	1.5mm以下の粒を含む	良好	外・自然焼, 鉄付 着 内・自然焼付着
*	6	SC26	*	16.4	8.4	859.4	先端・黒塊, 灰 質, 羽口・塊 質, 灰質	先端・黒塊, 羽 口・塊質, 黄 緑	4mm以下の粒を含む	良好	外内・自然焼付着

瓦 観 察 表

調査 番号	遺物 番号	出土 地点	器種	文様および観察		焼成	色 調		胎 土	備 考
				外	内		外	内		
35	1	SE2	軒丸瓦	巴 珠文 丁窓タナテ	器背さえの横ナテ 工具痕	良好	明焼灰 灰白	灰白	1mm以下の粒を含む	
*	2	華IT	軒丸瓦	ナテ 珠文	ナテ	良好	黄	にぶい黄	繊維粒を含む	
*	3	SE3	軒平瓦	ヨコナテ	ナテ	良好	灰	灰	繊維粒を含む	
*	4	SC14	玉縁付 丸瓦	ナテ	布目 強い器ナテ 器取り	良好	浅黄	灰 浅黄	0.5mm以下の粒を含む	
*	5	SC12	玉縁付 丸瓦	ヨコナテ	布目 ヨコナテ 器取り	良好	灰	浅黄	3.5mm以下の粒を含む	
*	6	SC10	丸瓦	ナテ 器取り	布目 (1cm四方) 器取り	良好	灰	にぶい黄	2mm以下の粒を含む	
*	7	A3G	丸瓦	風化気味 タナテ	布目 器取り	良好	にぶい黄緑	にぶい黄緑 灰	1.5~5.5mmの粒を含む	
*	8	SE3	丸瓦	ナテにヘラ状工具痕	布目 (1cm四方) タテ 不明 ヨコ 12本	良好	灰白	浅黄	2mm以下の粒を含む	
*	9	SH7	丸瓦	工具ナテ 風化気味	布目 風化気味	良好	灰	灰	2~3mmの粒を含む	
*	10	SC10	不明	波次にナテ ナテ	ナテ	良好	灰	灰	0.6mm以下の粒を含む	
*	11	SE2	棟瓦	ヘラ状工具ナテ	ナテ 布目痕	良好	黄	黄	2mm以下の粒を含む	
*	12	SE2	平瓦	ナテ	ナテ 器取り	良好	灰	灰	繊維粒を含む	
*	13	SC10	平瓦	縦, 横のナテ	丁窓を縦, 横のナテ	良好	黄	黄	3mm以下の粒を含む	

第V章 ま と め

高岡遺跡は、これまで報告してきたように、古墳時代から古代、中・近世、近・現代と幅広い時期の遺構・遺物が検出された複合遺跡である。時代幅が多岐に亘るため時間的制約と勉強不足が災いし調査結果を十分に検討することができなかった。ここでは検出された遺構・遺物に関していくつかの問題点を述べてまとめにかきたい。

1. 古墳時代の遺構・遺物

今回の調査で検出された古墳時代の遺構は、竪穴式住居(SA1・2)2軒である。どちらも主軸をほぼ南北にもちSA2は長方形プランを呈し、SA1も方形プランを呈すると推定される。しかし、遺物の集中度とその内容からみると遺構があることは確認できるが平面プランが不明瞭であることと、どちらも柱穴を検出できなかったことが住居と断言するには条件が不足していると思われる。

SA1は通常の住居内遺物の出土状況であったが、SA2は流れ込んできた土砂に押しつぶされたような状態で大量に出土している。土器の形態は、甕は外面のほぼ全体に5~6条の平行タタキ調整が施された後ナデ消されたものがほとんどで、底部は粘土を丸い型に押し込んで作る型つくりのものに胴部をつなぎ合わせていく作成技法が考えられる。頸部にくびれを意識してつくったものはわずかで、筒状に口縁まで延びる、いわゆる砲弾型のものが6割程を占めている。底部は丸底以外にも平底や丸底の平底もある。粘土のつなぎ目がみられる粗いつくりのものが多く、胎土に砂粒が故意に混ぜられているのが特徴である。壺は小型丸底壺を意識して作った小型丸底壺の大型のもので、開き気味にやや内湾しながら直口する長めの口縁に球形や扁球形の胴部を持つものが出土している。胎土は粒の細かいもろい土師質で外面にはヘラミガキが施されている。高坏は坏部にほとんど稜を持たないもの、坏底部近くで弱い稜を持つものがほとんどで、脚部に関しても脚柱部から裾部にかけて稜を持たずに緩やかに延びている。胎土は壺と同じ土師質で風化が著しいがヘラミガキ調整が施こされている。

これらの形態を持つ土器は須恵器を伴ってよい時期に位置すると思われるがここでは伴っていない。新富町八幡上遺跡の3号竪穴住居(古墳時代前期)も須恵器を共伴しないが、ここで出土した土器よりも若干新しく、5世紀後半の須恵器坏身を伴う宮崎市浄土江遺跡204号竪穴住居跡出土の土器の前前段階、いわゆる須恵器を伴う直前ぐらいに位置すると思われる。

また、SA1とSA2の出土遺物に関しては、それほど大きな時期差はみられないが、SA1出土の甕の頸部の稜がSA2よりも若干明瞭で、砲弾型の形態をもつのがみられないことからSA1の方がやや古くなるのではないと思われる。さらに、タタキ調整を持つ甕がこれほどの一括資料として出土していることから当地域ではこの時期にタタキ調整が主流を占めていたことがうかがわれる。

2. 古代から中・近世の遺構・遺物

(1) 遺 構

歴史時代の遺構には、柱穴群約400、土壇28基、溝状遺構6条、建物礎石根石跡16基と石垣がある。これらの遺構は古墳時代から現代に至までの遺物包含層に複雑に切り合いながら掘り込まれているため、遺構内の遺物はいろいろな時代のものが混在している。

柱穴群は建物が組めるものはみあたらなかった。出土遺物は古墳時代から近世までの土器、須恵器、陶磁器片などである。

土壇については、28基のうちSC11・24からは平安時代中期頃の土師皿、東播系の鉢、内面に粗いケズリのある土師質の甕が、SC25からは13世紀頃の短頸壺や須恵器、土師皿等が出土している。それ以外の土壇は陶磁器や瓦等を廃棄するために掘り込んだもので近世から近・現代の時期を呈する。今回、SC11・24・25を中心に包含層からかなり多くの土師質の皿や坏が出土しているが、詳細な分類については行なわなかった。今後の課題としたい。ちなみにヘラ切り底の皿がおよそ28%、糸切り底がおよそ18%である。

溝状遺構は、SE1・2・3・6が調査区の中央部を東西に横切っている。以前はこの溝の兩岸に屋敷が建てられていたので、おそらく区画の他、生活排水や雨水を流すための溝であったと推定される。切り合いは、SE6→SE2→SE1→SE3の順でSE6・2が廃絶した後造成してSE1を掘り込み、SE1が廃絶した後にまた造成を行ないSE3を掘り込んでいる。SE5は鉄滓やフイゴの羽口などSE3と類似したものが出土しているため、SE3に続く可能性が考えられる。SE2は17世紀から18世紀代の肥前染付を中心に、SE3は18世紀後半から明治時代の遺物が出土している。

次に屋敷遺構について述べてみたい。

当調査区は藩政時代の屋敷割でみると小倉、大岐、黒川氏の屋敷にあたる。最近までは大岐氏の屋敷と空き家があったようであるが、今回検出された屋敷遺構は黒川氏の屋敷があったところで最近では空き地になっていたようである。屋敷遺構は礎石の根石16基と石垣で、SE3を掘り込む前に造成した面に遺構が検出されているので、SE3に伴う遺構として幕末に構築されたと想定される。また、遺構の切り合い状況からみて二つのことが推測される。まず第一は、土地の造成を行なって礎石を配置し、その後地形の下がる方向に土留めと補強のための石垣を埋め込んだ。これは礎石と石垣をひとつの建物に使用した場合である。第二は、土地の造成を行なった後、礎石の建物を建てる。その後建物を廃絶して建て替えを行なう時に石垣を埋め込んだ場合である。後者は、石垣に伴う礎石痕がみあたらないことから前者の考えが適当であると思われる。第16図の屋敷間取り図は前者に基づいて作成したものである。

(2) 遺物

遺物は、陶磁器をはじめ土師器、須恵器、キセル、銭貨、鉄滓、フイゴの羽口、石器等が出土している。ここでは特徴的なことについて述べたい。

陶磁器は17世紀から19世紀代の肥前産のものを中心としている。その中でも18世紀後半のものが多く出土している。また、遺物のなかに二次的な火熱を受けているものがあるが、これが17世紀代の遺

物に限られていることは興味のあるところである。この他に、中国産や在地産のものも量的にはそれほど多くないが出土している。

次に当遺跡では大量の鉄滓とファイゴの羽口が出土していることも特徴とされる。調査区のほぼ全体に炭化物がみられ、特にSC17とSE3の辺りは集中していた。鉄滓とファイゴの羽口を持つ遺構はSC1～4・6・7・9・10・12～14・16～23・26・29・31・32、SE1～3・5・6である。薩摩藩の郷士は生計を支えるために副業をもっていた。その多くは養蚕であった。これは推定の域をこえないが、おそらく郷士が副業として鍛冶業を行っていたのではないかと想定される。

今回の調査にあたって、あまりにも広範囲に亘る複雑な資料に閉口し、わからないことの多さに筆者の力量不足を痛感させられた。調査や整理作業のなかで想起した問題点を含めそれらを深化させることができなかったことが残念であるが、今後の課題としておきたい。

「高岡麓」は筆者にとって忘れることのできない遺跡である。不手際な調査員についてきて下さった現場作業員の方々や整理作業員の方々、また、調査や整理作業中に御指導いただいた方々にたいして衷心より感謝の意を表したい。

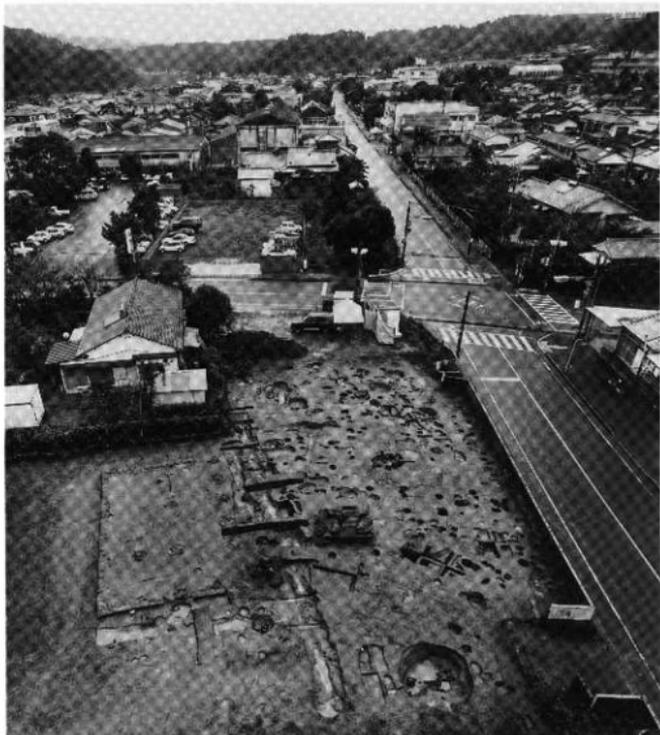
〈参考文献〉

- (1) 「七又木地区遺跡（八幡上・七又木・銀代ヶ迫遺跡）」『新富町文化財調査報告書』第2集 宮崎県新富町教育委員会 1992年
- (2) 「日向の土師器」『えとのす32 古代日向-2』永友良典
- (3) 「浄土江遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』第6集 宮崎市教育委員会 1981年

報 告 書 抄 録

ふりがな	たかおかふもと							
書 名	高岡麓遺跡							
副 書 名	高岡郵便局庁舎新築工事に伴う発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名								
シリーズ番								
編 著 者 名	久木田 浩 子							
編 集 機 名	宮崎県教育委員会							
所 在	〒880 宮崎市橋通東1-9-10 ☎ 0985-26-7251							
発行年月日	西暦1996年3月							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃 〃	〃 〃		m ²	
たかおかふもと 高岡麓遺跡	たかおかふもと 高岡町大字飯 田字井ノ上	45381	406	31° 57' 16"	131° 18' 18"	19941020 ~199501 20	865m ²	高岡郵便 局庁舎新 築工事

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
たかおかふもと 高岡麓遺跡	散布地	古墳中期	竪穴住居2軒	土師器 石器など	
	◇	平安時代	土壇2基	土師器 須恵器 布痕土器など	
	◇	中 世	土壇1基	土師器 須恵器など	
	◇	近 世 ? 現 代	礎石建物遺構 石垣 柱穴 土壇25基 溝状遺構6条	陶磁器 瓦 フイゴの羽口 キセル 銭貨 石製品など	鉄滓を多く出土



遺跡全景（東より）



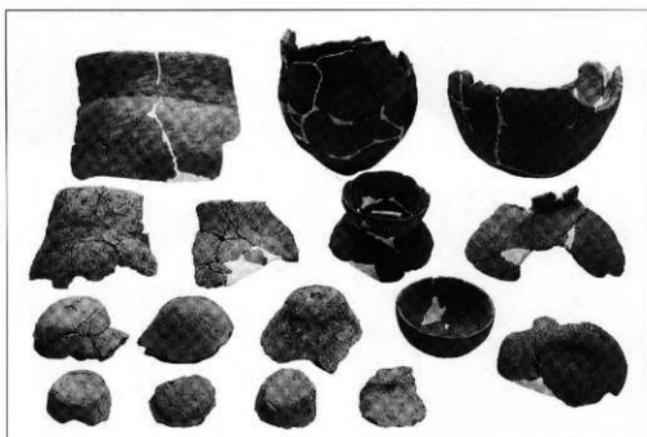
作業風景（後ろに天ヶ城跡を望む）



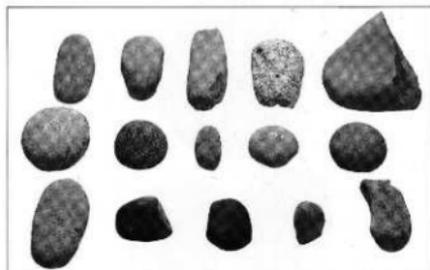
出土磁器等遺物



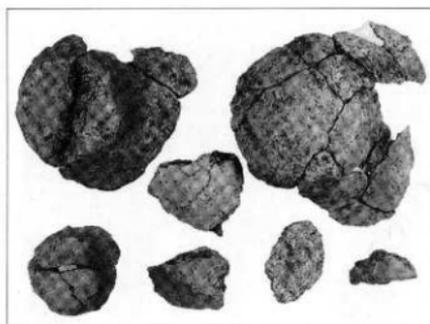
SA 1 遺物出土状況



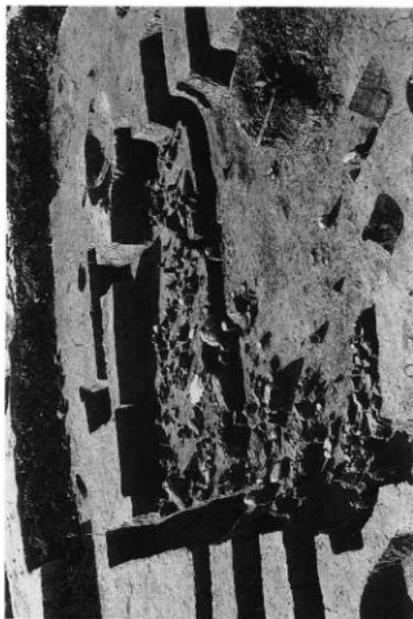
SA 1 出土遺物



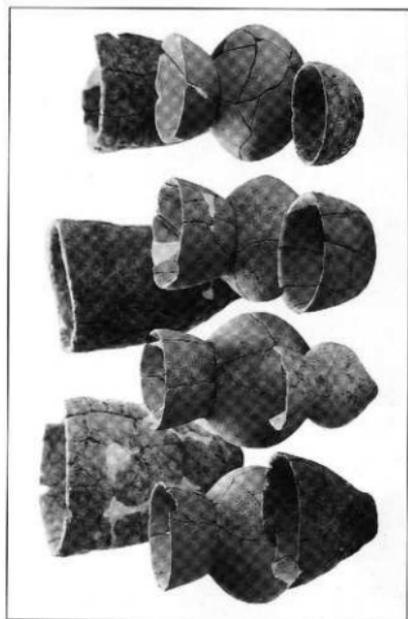
SA 1・2・包含層出土石器



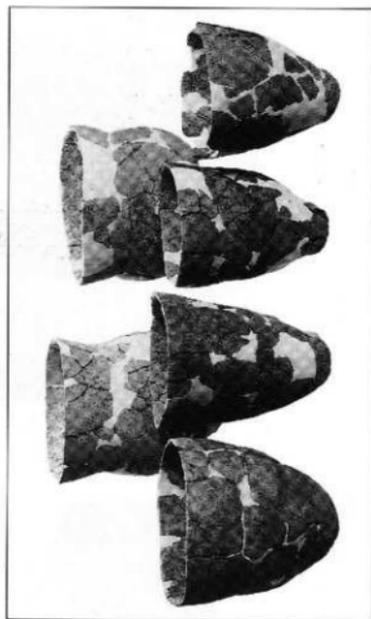
SA 2 出土遺物



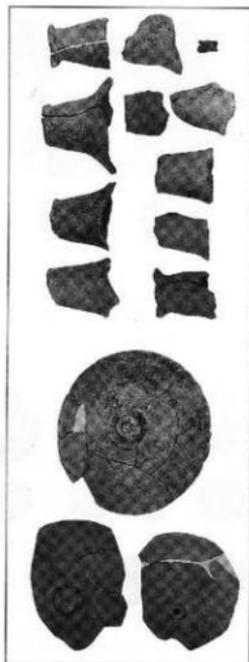
SA 2 遺物出土状況



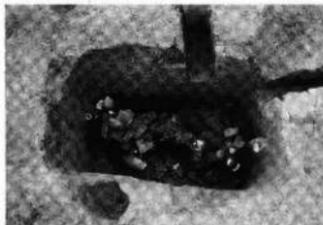
SA 2 出土遺物



SA 2 出土遺物



SA 2 出土遺物



SC9 (東より)



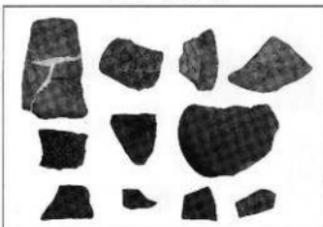
SC11半さい状況 (東より)



SC14 (東より)



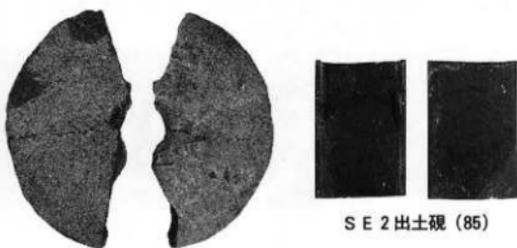
SC26 (南より)



SH (柱穴群) 出土遺物



キセル

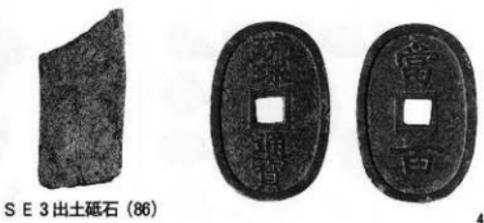


SE2出土硯(85)

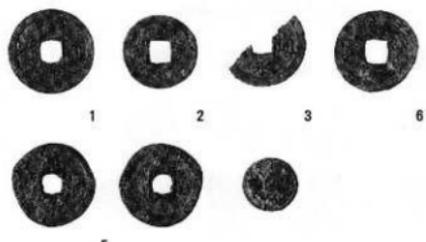
SE6出土石臼(92)



フィゴの羽口



SE3出土砥石(86)



銭 貨



礎石と石垣（東より）



SE 3 鉄滓・フィゴの羽口出土状況



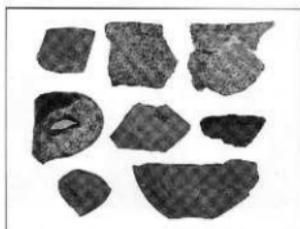
礎石 No 2



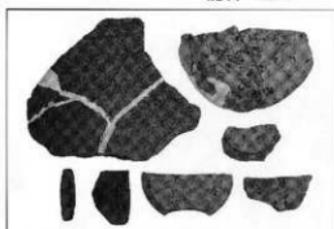
礎石 No 9



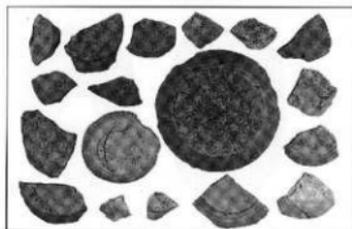
礎石 No 13



SC 11出土遺物



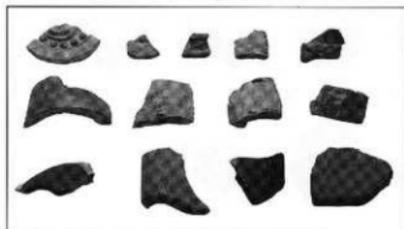
SC 24出土遺物



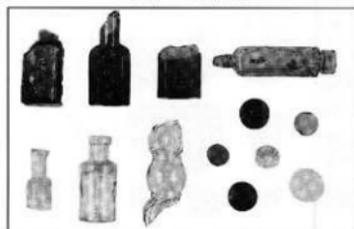
包含層（近世面）出土遺物



土人形・土製品等



瓦（1～13）



ガラス製品